平成27年度科学研究費補助金 「基盤研究 C | 研究報告

--研究課題:

書の芸術性に関する術語と現代学者の解釈を めぐる比較研究

A Comparative Study of Technical Terms on the Artistry of Calligraphy and Contemporary Scholars' Interpretations

研究代表者 河内 利治 研究分担者 藤森 大雅 Toshiharu Kawachi & Hiromasa Fujimori

I. 研究目的

本研究は、現代中国の学者が古典からどのような術語をどのように解釈して書の芸術性を重要視したかを解明するものである。書は東アジア固有の芸術であり、中国では古代より現代に至るまで多くの学者が多様な角度から言及して来た。本研究では現代中国において書を論じた学者、林語堂・宗白華・李沢厚・葉朗・熊秉明・邱振中の6名に焦点を当て、彼らが古典文献から書の芸術性に関する如何なる術語を重視し、どのように解釈して書の美学思想を形成するに至ったかを解明することが第一の研究目的である。21世紀に生きる現代日本人の観点に立って、時空を超えた書の芸術文化現象の諸価値を内在的に再構成することが第二の研究目的である。東アジアから世界に向かって書の芸術性を発信することが第三の研究目的である。

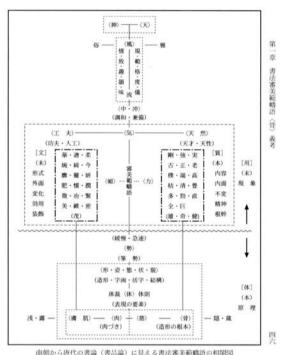
①研究の学術的背景

中国現代史上、蔡元培・王国維・梁啓超は「美学」の概念を中国に紹介した先人であり、その後の重要な中国美学者は4人――朱光潜・宗白華・蔡儀・李沢厚である。(中国社会科学院文学研究所研究員・文学理論研究室主任高建平氏の言。)その一人、宗白華(1987-1986)は次のように言う。「生き生きとした自然界の形象、その本来の形体と生命は、何によって構成されたのであるか。われわれの常識では、一つの生命の形体は、骨・肉・筋・血から構成されていることを知っている。〈骨〉は生物体の最も基本的な構造で、骨があることによって、一つの生物体ははじめて能く立って行動することができる。骨に附着している

筋は、すべての動作の主宰で、われわれの運動感の源泉である。骨と筋の外側に附着して、 肉は骨と筋を包んで生命体に形象を有らしめている。筋肉の中に流れている血液栄養は、形 体全体を潤している。骨・肉・筋・血などがあって、一つの生命体が誕生するのである。中 国古代の書家が「字」も生命を表わし、生命を反映する芸術にしようとするなら、彼がもっ ている方法と工具で、字に一つの生命体の骨・肉・筋・血などの感覚を表わさなければなら

なかった。しかし、ここでは完全に絵 をかいて、直接に客観形体を手本とし て示すのではなく、それはかなり抽象 的である点・線・筆画などを通じて、 われわれが情感と想像の中から、客体 形象の骨・肉・筋・血などを体得させ、 音楽や建築のように、われわれの感情 および体の直感的形象を通じて、人類 の生活内容と意義をも啓示できるので ある。| (宗白華「中国書法における美 学思想」1962年より)

申請者は「南朝から唐代の書論(書 品論) に見える書法審美範疇語の相関 図」(右図、『書法美学の研究』2004年、



p.46、汲古書院)を作成し、造形の根本である〈骨〉〈筋〉〈肉〉字から形体表現の要素を考 察し、主要な書の芸術性に関する術語を提示した。これは中国古典(書論)における書の芸 術性に関する術語を中国現代の美学者が重視して書の美学思想を如何に形成したかを解明し 得る一例である。

それは21世紀を代表する作家林語堂(1895 ~ 1976)が、『My Country and My People』 (1935) において、「中国書法の美をアミニズムの原理に帰すことは、私の発想ではなく、中 国の文献に見える筆使いの〈肉〉〈骨〉〈筋〉に証明されている。しかしそれらの哲学的な意 味は、西洋が書法を知的に理解できる方法や意味について考えるようになるまで、意識的に は論じられてこなかった」とし「中国美学の基礎としての中国書法の最重要点は、中国の絵 画と建築の研究に見られよう。中国絵画の線や構成と中国建築の形態と構造において、中国 書法から発展した原理を理解することができよう。こうした韻律・形態・情趣の基本的な考

えが、たとえば詩、絵画、建築、磁器、室内装飾など、中国芸術の異なる線に本質的な精神 体系を与えている」と論じる通りである。

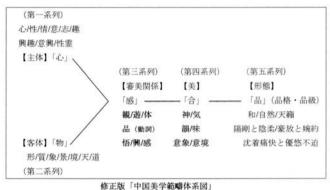
さらに現代の中国美学者李沢厚(1930-)が『華夏美学』(中外文化出版公司、1989)において審美対象の拡大や唐の張懐瓘『書断』について論じていることもその一例である(李沢厚著/興膳宏・中純子・松家裕子訳『中国の伝統美学』平凡社、1995年所収、第三章「儒・道の相互補完」第二節「天地は大美有れども言わず」参照)。同じく現代の中国美学者葉朗(1936-)も「唐代の孫過庭、張懐瓘、清代の劉熙載は研究するに値する。張懐瓘の特徴はかなりの理論的体系を有しており、思弁性があり、書いたものが少なくなく、マクロとミクロの両方の視点があり、研究に値する。劉熙載も良い。私は清代前期が全中国の伝統芸術を総括する時期であると考えている。……詩歌の領域では葉燮、絵画の領域では石濤であり、彼らはある面において総括的性質を帯びている。劉熙載は(清代後期のため)やや後れたが、彼のものは古典的範疇に属しており同様に総括の性質を帯びている」(上海書画出版社発行『書法』2002年8月号、鄭暁華「凝聚学界精英:応対時代挑戦——葉朗教授訪談録」p.10)と書論の理論的体系と総括的性質を説いている。

現代中国を代表する書法理論の専門家熊乗明(1922 - 2002)が『中国書法理論体系』香港商務印書館1985年(拙訳『中国書論の体系』白帝社2006年)において、同じく現代中国を代表する書法理論の専家邱振中(1947 -)が『筆法与章法』(監訳『筆法と章法』芸術新聞社2014年)において、如上同様に書の芸術性に関する術語を重視して書の美学思想を形成している。特に「邱振中の最大の価値は、中国書法に対する思考の方式を変えたことにある。彼は流行する概念をわざと使用せずに文章を深く掘り下げただけでなく、簡単な理論の転用さえも行っていない。彼の言葉には智慧があり魅力があり、あらゆる語彙は彼が必要とするものである。現代の書法が進展するなかで、彼のような思考をもつ人はいない。現代の書法理論について言えば、邱振中は大きなターニングポイントであり、もし彼の理論を否定する者が登場するならば、その人はまず彼の中から多くのものを摂取するはずだからである。一 劉驍純(中国芸術研究院)」と評されるように、歴代書論から書の芸術性に関する術語(専門用語)を創り出して書の美学思想を形成している。

申請者は如上6人の論著を踏まえつつ、同時に成復旺主編・中国人民大学出版社《中国美学範疇辞典》を共同で完訳した(2002~2013)。その中で重要なのが下図の修正版「中国美学範疇体系図」である。

下図に見える術語が、中国美学全体における最重要の範疇(概念)である。本図は、詩文

書画や音楽理論の古典文献のみならず哲学思想書からも抽出しているため、中国美学の解釈 のみならず、時空を超えた書の芸術文化現象の諸価値を内在的に再構成することができる上、 東アジアから世界に向かって書の芸術性を発信することが可能である。



②研究期間内に何をどこまで明らかにしようとするのか

現代「中国美学」の先駆者である林語堂と宗白華、その継承者、李沢厚と葉朗、そして書 法理論から書法美を検討した態秉明と邱振中が重視した書の芸術性に関する術語をそれぞれ の論著から抽出し、「南朝から唐代の書論(書品論)に見える書法審美範疇語の相関図」、 《中国美学範疇辞典》の解釈と修正版「中国美学範疇体系図」とを比較考察して解明し、書 の美学思想の核心となる範疇(概念)を提示する。さらにそれに基づき、書を含む芸術文化 現象の諸価値に関する術語を提示する。

③当該分野における本研究の学術的な特色・独創的な点及び予想される結果と意義

中国美学と書法との関連における体系的、歴史的、総合的研究自体が、日本ではほとんど 進展しておらず、かつ美学芸術学の視点からの書法理論(書論)の研究も進んでいない。こ の点において本研究は極めて学術的・独創的な研究意義を有している。西洋美学中心に研究 されてきた美学思想では中国美学を解明できないが、現代中国学者6名が如何に古典文献資 料(書論)から書の美学思想を形成したかを解明できることが予想され、時空を超えて書の 芸術文化現象の諸価値を内在的に再構成することに本研究の最大の学術的意義がある。日本 から東アジアそして世界に向かって書の芸術性を発信しうることにも研究意義がある。

Ⅱ.研究計画・方法

「中国美学範疇体系図」に見られる〈意〉〈天〉〈神〉〈韻〉〈和〉などの範疇の審美術語が、

どの時代の書人・どの書論に用いられるかの用例を、2012年度大東文化大学人文科学研究所研究報告書『成復旺主編・中国人民大学出版社《中国美学範疇辞典》訳注索引』の「人名索引」と「書名(作品名)索引」から精査すると同時に、林語堂・宗白華・李沢厚・葉朗・熊乗明・邱振中6名の各論著が引用する歴代書論の審美術語の用例を検出し、どのような書論を重視しどのような書の芸術性に関する術語を重視したかを比較考察して解明し、「中国美学範疇解釈対照表」を作成する。併せて海外共同研究者(成復旺・邱振中・高建平・鄭暁華)の先生を2名招聘して、シンポジウム「書の芸術性をめぐる術語解釈」を開催し、研究成果の一端を公表するとともに、専用HPを開設して社会に向けて発信する。

全三年間の計画の流れと各年度の主題は次の通りである。

- ○H27年度:『《中国美学範疇辞典》訳注索引』「人名・書名(作品名)索引」用例抽出データベース化
- ○H28年度: 林語堂・宗白華・李沢厚・葉朗・熊秉明・邱振中の審美術語の用例検出と比較 考察
- ○H29年度:「中国美学範疇解釈対照表」作成とシンポジウム「書の芸術性をめぐる術語解釈」開催

平成27年度の計画

『成復旺主編・中国人民大学出版社《中国美学範疇辞典》訳注索引』の「人名索引」と「書名(作品名)索引」から抽出した審美術語の用例をデータベース化して「審美術語用例集」を作成し、その解釈の再検討を『成復旺主編・中国人民大学出版社《中国美学範疇辞典》訳注第一冊~第七冊』を基に行う。研究代表者、研究分担者ならびに研究協力者が分担してデータベースに入力し、二箇月に1回のペースで会議を開いて進捗状況を確認しながら解釈の再検討を行う。会議は3年間継続するものとする。また研究成果の一端を公表するために専用ホームページを開設する。この再検討は、次年度に林語堂・宗白華・李沢厚・葉朗・熊秉明・邱振中の審美術語の用例と比較考察を行うための土台になるものである。

平成28年度の計画

《中国美学範疇辞典》から抽出した「審美術語用例集」と林語堂・宗白華・李沢厚・葉朗・ 熊乗明・邱振中に見られる書の芸術性についての審美術語との比較考察を行う。研究題目 「書の芸術性に関する術語と現代学者の解釈をめぐる比較研究」の主たる研究内容はこの比 較考察にある。そのため6名の各論著が引用する歴代書論の審美術語の用例から、彼らがど のような書論を重視し、どのような書の芸術性に関する術語を重視したかを比較考察して解 明する。林語堂については、英文著書『My Country and My People』PART TWO: LIFE, W. THE ARTISTIC LIFE, II. CHINESE CALLIGRAPHY (pp.290 – 297) を中心に考察する (河内監訳有)。テキストは日本大学文理学部図書館蔵のTHE JOHN DAY COMPANY, INC, 1935 (1st Printing, August) に基づくHALCYON HOUSE EDITION, 1938 (12th Printing, January), PRINTED AND BOUND BY THE CORNWALL PRESS, INC., FOR BLUE RIBBON BOOKS, INC., 386 FOURTH AVE., NEW YORK CITY, Printed in the United States of America を底本とする。すでに上海学林出版社『中国人』1994年、華齢出版社『吾国与吾民』1995年および講談社学術文庫『中国=思想と文化』鋤柄治郎訳1999年の三書の翻訳があり、適宜参照しながら比較考察する。

宗白華については、『宗白華全集 [第2版] 全4巻』安徽教育出版社2008年と「中国書法 里的美学思想」(『現代書法論文選』上海書画出版社編輯出版1980年所収、『哲学研究』1962 年第1期初出)を基本文献とする。中田勇次郎編『中国書道全集』第7巻、温禎祥訳「中国 書法における美学思想」を参照する。

李沢厚については、『美的歴程』1983年初版・三聯書店2009年(第五章「魏晋風度」河内 訳有り)と『華夏美学』中外文化出版公司1989年(興膳宏ほか訳『中国の伝統美学』平凡社 1995年)を基本文献とする。

葉朗については、『中国美学史大綱』上海人民出版社1985年(序論/第9章魏晋南北朝の 美学(上)/第11章唐五代書画美学/第13章宋元書画美学のみ河内監訳有)を基本文献とす る。

熊乗明については、『中国書法理論体系』香港商務印書館1984年・天津教育出版社2002年 (河内訳『中国書論の体系』白帝社2006年)を基本文献とする。

邱振中については、『書法的形態与闡釈』(修訂版)中国人民大学2011年および『筆法与章 法』広西美術出版社2012年(河内監訳『筆法と章法』)芸術新聞社2014年)を基本文献とす る。

なお林語堂・李沢厚・熊秉明については研究代表者が、宗白華・葉朗・邱振中については 研究分担者がそれぞれ主担当して比較考察する予定である。

平成29年度の計画

以上の比較考察の結果を、夏季休暇前に「中国美学範疇解釈対照表」として作成する。夏季休暇中に北京に出張し、成復旺(中国人民大学)・邱振中(中央美術学院)・高建平(中国 社会科学院)・鄭暁華(中国人民大学)ら「海外共同研究者」と会見して、シンポジウム 「書の芸術性をめぐる術語解釈」開催に向けての最終的な打ち合わせを行い、うち2名の研究者を招聘してシンポジウムを11月初旬に開催する。年度内にシンポジウムを含む研究報告書「書の芸術性に関する術語と現代学者の解釈をめぐる比較研究」を簡易製本し公刊する。併せて研究成果を専用ホームページに掲載する。

研究が当初計画どおりに進まない時の対応

予想されるのは、現在の日中関係の状況如何によっては、訪中が不可能になる可能性があることである。その場合でもシンポジウムは開催できると判断している。また中国美学関連書籍・中国書論関連書籍を購入し得ない可能性(版元切れ)がある。その場合は複写するなどして対応する。その他は臨機応変に対処する。

研究計画を遂行するための研究体制について

大東文化大学人文科学研究所「東アジアの美学研究班」を母体にして研究体制を組織する。 研究分担者および研究協力者はすべて同班のメンバーである。また本研究に直接関わる先生 を海外共同研究者として組織する。「東アジアの美学研究班」月例会およびメール等で連絡 を取り合いながら研究計画を推進する。特に研究資料の収集・整理・翻訳・校閲等を大東文 化大学文学部書道学科非常勤講師の亀澤孝幸氏にお願いする。

研究分担者

藤森 大雅 (大東文化大学書道研究所特任講師・博士 (書道学/大東文化大学))

研究協力者

門脇 廣文 (大東文化大学文学部中国学科教授・博士 (文学/東北大学))

橋本 貴明(国学院大学文学部准教授・博士(芸術学/筑波大学))

須山 哲治 (慶応義塾大学文学部専任講師・修士 (文学/慶應義塾大学))

荻野 友範 (慶応義塾高等学校教諭・博士 (文学・早稲田大学))

秋谷 幸治(国士舘大学文学部講師・博士(中国学・大東文化大学))

角田 健一(大東文化大学文学部書道学科助教・博士(書道学/大東文化大学))

亀澤 孝幸 (大東文化大学文学部書道学科非常勤講師・博士 (書道学/大東文化大学))

池田絵理香(大東文化大学大学院文学研究科書道学専攻博士課程前期課程2年)

西 原歩 (大東文化大学大学院文学研究科書道学専攻博士課程前期課程2年)

海外共同研究者

成 復旺(中国・中国人民大学退休教授)

邱 振中(中国・中央美術学院教授・書法与絵画比較研究中心主任)

- 高 建平 (中国・中国社会科学院文学研究所研究員・文学理論研究室主任)
- 鄭 暁華(中国・中国人民大学教授・芸術学院院長)
- 白 謙慎(中国・浙江大学教授)
- 林 進忠(台湾・國立臺灣藝術大學教授・副校長)
- 喩 建十(中国・天津美術学院教授)
- 王 力軍(中国・山西大学副教授・博士(書道学/大東文化大学))
- 黄 華源(台湾・國立臺灣藝術大學講師・博士(書道学/大東文化大学))
- 陳 柏伩(台湾・博士(書道学/大東文化大学))

Ⅲ. 平成27年度計画遂行

①「審美術語用例集」の作成

河内利治作成の修正版「中国美学範疇体系図」(大東文化大学人文科学研究所東アジアの 美学研究班『中国美学範疇研究論集』第二集、2014年)所載の美学範疇語について、『中国 美学範疇辞典』の記載(まずは書論に限定する)を抽出し、「審美術語用例集」を作成した。 「体系図」所載の範疇語検出の分担は以下のとおりである。

- ○第一系列【主体】「心」(心/性/情/意/志/趣/興趣/意興/精霊) ……西原
- ○第二系列【客体】「物」(形/質/象/景/境/天/道) ……亀澤
- 〇第三系列【審美関係】「感」(観/遊/体/品(動詞)/悟/興/感)······河内·藤森
- ○第四系列【美】「合」(神/気/韻/味/意象/意境) ……藤森
- ○第五系列【形態】「品」〔品格・品級〕(和/自然/天籟/陽剛と陰柔/豪放と婉約/沈着痛快と優悠不追) ·····池田

②月例研究会議

場所:河内研究室/参加者:河内、藤森、池田、西原、亀澤

第1回 平成27 (2015) 年 4月 7日 (火) 11:00-12:00

第2回 平成27 (2015) 年 4月15日 (水) 14:00-15:00

第3回 平成27 (2015) 年 5月20日 (水) 17:00-18:20

第4回 平成27 (2015) 年 6月17日 (水) 17:00-18:00

第5回 平成27 (2015) 年 7月31日 (金) 16:00-17:00

第6回 平成27 (2015) 年 8月31日 (月) 10:00-11:00

第7回 平成27 (2015) 年 9月29日 (火) 14:00-15:00

第8回 平成27 (2015) 年10月27日 (火) 15:00-16:30

第9回 平成27 (2015) 年11月24日 (火) 14:00-16:00

第10回 平成27 (2015) 年12月15日 (火) 16:00-17:30

第11回 平成28 (2016) 年 1月19日 (火) 14:00-15:00

③科研関連活動報告

- ・6/16:平成27年度科学研究費助成事業に係る執行説明会(学内)参加
- ·6/23:「平成27年度 科研費助成事業 (学術研究助成基金助成金) 基盤研究 (C) 交付決定 通知書」受領
- ・6/23:『科研費ハンドブック(研究者用)』(2015年度版、文科省研究振興局 独立行政法人 日本学術振興会) 受領
- ・8/31:書論関連書籍活用の検討
- ・9/3-4:「東アジア〈書の美学〉国際シンポジウム」参加(藤森・亀澤)
- ・9/24: 平成28年度科学研究費申請説明会 於2号館2-220会議室 河内利治講演「科研費取得へ向けて」
- ・9/29:河内利治基調講演「人文学と芸術学の研究環境の変化」('14書学書道史学会大会 於:花園大学) 共有
- ・10/26:東アジアの美学研究会 藤森大雅発表「書の芸術性に関する術語と現代学者の解釈をめぐる比較研究 〈意境〉と〈神彩〉について 」
- ・10/14: CITI Japan onスクリーン eラーニング講座 河内利治修了
- ・12/30: CITI Japan onスクリーン eラーニング講座 藤森大雅修了

④国内調査 (新潟「書の美学シンポジウム」参加報告)

今回の国内調査は、平成27年度科学研究費補助金基盤研究C「書の芸術性に関する術語と 現代学者との比較研究」(代表研究者:河内利治)において、関連する講演の聴講および研 究協力者である邱振中氏への協力要請を目的として、藤森大雅、亀澤孝幸が参加した。

東アジア〈書の美学〉国際シンポジウム、東アジアにおける〈書の美学〉の伝統と変容は、 日本・中国・韓国といった東アジア漢字文化圏のみならず、欧米の研究者も招聘し、東西の 視点から書の美学の"伝統"と"変容"について理解を深める目的で行われた公開シンポジウム である。9月3日、4日の二日間のプログラムは以下の通り。

9月3日(木) テーマ:中国書法の伝統と形成

【基調講演】

「書の美学-東洋と西洋の間で」神林恒道(新潟市會津八一記念館館長)

【発表】

加地伸行 (大阪大学名誉教授)

/中国哲学における伝統の形成・文字学

傅申(台湾大学芸術史研究所教授)

/ 〈流日半巻本〉により台北故宮博物館蔵《自叙帖》は懐素真蹟に非ずを論ず

ロタール・レデローゼ (独・ハイデルベルク大学東洋美術史研究所教授)

/中国最大の奥書-579年に鐡山に建立された石頌

邱振中(中央美術学院教授)

/書作品中の運動と空間

ヨーレン・エスカント (仏・社会科学高等研究院研究ディレクター)

/中国書論における逸品 (Yipin) とは何か

劉悦笛(中国社会科学院哲学研究所副研究員)

/現代中国書法の試み - 徐冰(Xu Bing)を例として

【討論会】「新潟の書の伝統」

ファシリテーター:神林恒道

登壇者:野中浩俊(岐阜女子大学教授) 角田勝久(新潟大学准教授)

清水文博 (新潟大学講師) 松矢国憲 (新潟県立近代美術館専門学芸員)

喜嶋奈津代 (新潟市會津八一記念館主査学芸員)

9月4日(金)テーマ:日本・韓国における書の変容

【発表】

島谷弘幸 (九州国立博物館館長)

/中国書法の影響と日本の書-古代から平安時代まで-

萱のり子 (東京学芸大学教授)

/和歌をつむぐ書-仮名の詩情-

朴聖媛 (韓国国立中央博物館学芸研究士)

/韓国ハングル書芸と中国書法との関係について

関周植(韓・嶺南大学教授)/韓国の芸術文化、その'モッ(및)'の世界 ジョン・カーペンター(米・メトロポリタン美術館学芸員)

/アメリカにおける日本の書のコレクター: 意味を超えたフォルムの理解 ボグダノワ・ジェーニャ(独・ハイデルベルク大学博士課程在籍)

/戦後の日本前衛書道と欧米抽象絵画における余白の概念について 尾崎信一郎(鳥取県立博物館副館長)

/書と抽象絵画-1950年代の二つの実践

【共同討議】「コンピュータ時代における書の可能性」

ファシリテーター: 萱のり子 (東京学芸大学教授)

登壇者:下野健児(花園大学教授) 尾崎信一郎(鳥取県立博物館副館長)

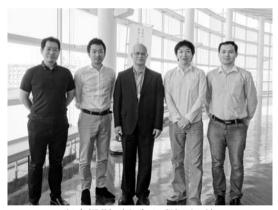
潘 襎 (佛光大学副教授) 関周植 (韓国・嶺南大学教授)

ジョン・カーペンター (米・メトロポリタン美術館学芸員)

ボグダノワ・ジェーニャ (独・ハイデルベルク大学博士課程在籍)

シンポジウム1日目、邱振中氏の発表「書作品中の運動と空間」を拝聴した後、話をする機会を得た。そこで、本研究の主旨説明と研究協力要請をしたところ、ご快諾いただいた。また、3年計画の最終年度に開催予定のシンポジウムについても、スケジュール次第で検討する旨のご返事を頂戴した。

今回のシンポジウム参加により、邱氏



記念撮影 (中央が邱振中氏)

と直接交流する機会を得たことは今後の協力関係を円滑に進める上でも重要であった。28年 度には河内利治(研究代表者)、藤森大雅(研究分担者)が訪中し、研究を進める予定であ る。

国内外の著名な研究者の発表を拝聴し、新たな知見を得られた上に、国際的なシンポジウムの運営方法についても学ぶことができた点も大きな収穫となった。(藤森大雅)

以下、シンポジウムの発表のなかから、本研究に関連するものをいくつか取り上げ、ごく 簡単にその内容を書き留めておきたい。

フランスのヨーレン・エスカント氏は、中国の書画論にみえる「逸品」概念には歴史的変 遷があると指摘する。唐宋では、伝統的な規範から逸脱するという否定的ニュアンスを含ん でいたのに対し、明清では表現性と想像力をたたえる積極的な概念となったという。

ドイツのボグダノワ・ジェーニャ氏は、戦後日本の前衛書と欧米抽象絵画における「余白」概念の関係に着目する。抽象美術が全盛期を迎えていた1950年代、井上有一や森田子龍らは、前衛書を欧米に売り込もうとした。その際、久松真一と井島勉の理論から引き出した「無としての余白」という禅的な観念を付与することによって、欧米の抽象画家たちの関心を惹いたのである。

韓国の閔周植(ミン・ジュシュク)氏は、韓国人の美意識の特徴をもっともよくあらわす ものとして「モッ」(味)という語を挙げる。それは、貴族的な美意識に対して、庶民の生 活意識に根ざす美であり、何よりも精神的自由を重んじる。

コロンビア大学で日本古典文学をドナルド・キーンに学んだジョン・カーペンター氏が日本書道を専門に選んだきっかけが興味深い。氏は、光悦の書いた百人一首を見たとき、自分が知っていた歌とはまったく違うものに感じられたという。それまであくまで文学(テクスト)として学び親しんできた歌が、肉筆の書跡によって、新たな印象のもとに立ち現れたのだ。このような経験は、何か本質的なものに触れているのではないか。

カーペンター氏は「テクストとイメージのダイナミックな相互作用が作品解釈の新しい途を拓く」と主張する。日本文学の基礎の上に書道を学び始めた氏ならではの卓見といえよう。「書の美学」研究は、たんに文献研究に終わってはならない。また逆に、作品や作家の芸術学的研究のみで満足してもいけない。両者を接続し、交差させることこそ、書の美に迫りうる唯一の途なのである。(亀澤孝幸)

Ⅳ. 購入図書一覧

1 宗白華全集(全4巻) 2 中国=文化と思想(林語堂、鋤柄治郎) 3 吾国与吾民(修訂版) 林語堂 4 中国歴代美学文庫 葉朗 5 美学与芸術 5 美学与芸術 6 中国美学範畴叢書之二-文質彬彬 7 中国美学範畴叢書之一-文質彬彬 8 中国美学範畴叢書之一-文質彬彬 9 中国美学範畴叢書之一-和:審美理想之維 10 美的考索(第2版、上下)-中国美学範畴叢書 11 神思:芸術的精霊(第2版)-中国美学範畴叢書 12 虚実掩映之間(第2版)-中国美学範畴叢書 13 雅論与雅俗之辨(第2版)-中国美学範畴叢書 14 芸味説(第2版、上下)-中国美学範畴叢書 15 中国美学範畴叢書之八-意象範畴的流変 16 中国美学範畴叢書之八-意象範畴的流変 17 中国美学範畴叢書之八-意象範畴的流変 18 中国美学範畴叢書之供雪時晴帖 19 中国美学範畴叢書之供雪時晴帖 19 中国美学範畴叢書 10 美的考索(第2版)-中国美学範畴叢書 11 中国書法与古文字研究 12 虚実掩映之間(第2版)-中国美学範畴叢書 13 雅論与雅俗之辨(第2版)-中国美学範畴叢書 14 芸味説(第2版、上下)-中国美学範畴叢書 15 中国美学範畴叢書 16 中国美学範畴叢書 17 中国美学範畴叢書 18 中国美学範畴叢書 19 中国書法学部書書	
3 吾国与吾民(修訂版) 林語堂 33 芸術美学辞典 4 中国歷代美学文庫 葉朗 34 美学大辞典(修訂本) 5 美学与芸術 35 近現代書法美学建構之研究 6 中国美学範畴叢書之二-文質彬彬 36 唐代書画理論 7 中国美学範畴叢書之一意境探微 37 書論彙要 上下 8 中国美学範畴叢書之六-風骨的意味 38 近現代書論精選 9 中国美学範畴叢書之三-和:審美理想之維 39 林散之筆談書法 10 美的考索(第2版、上下)-中国美学範畴叢書 40 硯辺余墨 中国書法芸術論集 11 神思:芸術的精霊(第2版)-中国美学範畴叢書 41 中国書法与古文字研究 12 虚実掩映之間(第2版)-中国美学範畴叢書 42 墨香佛音 敦煌写経書法研究 13 雅論与雅俗之辨(第2版)-中国美学範畴叢書 43 晋 王義之 快雪時晴帖 14 芸味説(第2版、上下)-中国美学範畴叢書 44 宋 蘇軾黄庭堅蔡襄米芾四家小品	7 mg H1 K—77F
4 中国歷代美学文庫 葉朗 34 美学大辞典(修訂本) 5 美学与芸術 35 近現代書法美学建構之研究 6 中国美学範畴叢書之二 - 文質彬彬 36 唐代書画理論 7 中国美学範畴叢書之一意境探微 37 書論彙要 上下 8 中国美学範畴叢書之六 - 風骨的意味 38 近現代書論精選 9 中国美学範畴叢書之三 - 和:審美理想之維 39 林散之筆談書法 10 美的考索(第2版、上下) - 中国美学範畴叢書 40 砚辺余墨 中国書法芸術論集 11 神思:芸術的精霊(第2版) - 中国美学範畴叢書 41 中国書法与古文字研究 12 虚実掩映之間(第2版) - 中国美学範畴叢書 42 墨香佛音 敦煌写経書法研究 13 雅論与雅俗之辨(第2版) - 中国美学範畴叢書 43 晋 王義之 快雪時晴帖 14 芸味説(第2版、上下) - 中国美学範畴叢書 44 宋 蘇軾黄庭堅蔡襄米芾四家小品	
5 美学与芸術 35 近現代書法美学建構之研究 6 中国美学範畴叢書之二一文質彬彬 36 唐代書画理論 7 中国美学範畴叢書之一意境探微 37 書論彙要 上下 8 中国美学範畴叢書之六一風骨的意味 38 近現代書論精選 9 中国美学範畴叢書之三一和:審美理想之維 39 林散之筆談書法 10 美的考索(第2版、上下) - 中国美学範畴叢書 40 硯辺余墨 中国書法芸術論集 11 神思:芸術的精霊(第2版) - 中国美学範畴叢書 41 中国書法与古文字研究 12 虚実掩映之間(第2版) - 中国美学範畴叢書 42 墨香佛音 敦煌写経書法研究 13 雅論与雅俗之辨(第2版) - 中国美学範畴叢書 43 晋 王義之 快雪時晴帖 14 芸味説(第2版、上下) - 中国美学範畴叢書 44 宋 蘇軾黄庭堅泰襄米芾四家小品	
6 中国美学範畴叢書之二 - 文質彬彬 36 唐代書画理論 7 中国美学範畴叢書之 - 意境探微 37 書論彙要 上下 8 中国美学範畴叢書之六 - 風骨的意味 38 近現代書論精選 9 中国美学範畴叢書之三 - 和:審美理想之維 39 林散之筆談書法 10 美的考索(第 2 版、上下) - 中国美学範畴叢書 40 硯辺余墨 中国書法芸術論集 11 神思:芸術的精霊(第 2 版) - 中国美学範畴叢書 41 中国書法与古文字研究 12 虚実掩映之間(第 2 版) - 中国美学範畴叢書 42 墨香佛音 敦煌写経書法研究 13 雅論与雅俗之辨(第 2 版) - 中国美学範畴叢書 43 晋 王義之 快雪時晴帖 14 芸味説(第 2 版、上下) - 中国美学範畴叢書 44 宋 蘇軾黄庭堅蔡襄米芾四家小品	
7 中国美学範畴叢書之-意境探微 37 書論彙要 上下 8 中国美学範畴叢書之六-風骨的意味 38 近現代書論精選 9 中国美学範畴叢書之三-和:審美理想之維 39 林散之筆談書法 10 美的考索(第 2 版、上下)-中国美学範畴叢書 40 砚辺余墨 中国書法芸術論集 11 神思:芸術的精霊(第 2 版)-中国美学範畴叢書 41 中国書法与古文字研究 12 虚実掩映之間(第 2 版)-中国美学範畴叢書 42 墨香佛音 敦煌写経書法研究 13 雅論与雅俗之辨(第 2 版)-中国美学範畴叢書 43 晋 王義之 快雪時晴帖 44 崇咏説(第 2 版、上下)-中国美学範畴叢書 44 宋 蘇軾黄庭堅蔡襄米芾四家小品	
8 中国美学範畴叢書之六-風骨的意味 38 近現代書論精選 9 中国美学範畴叢書之三-和:審美理想之維 39 林散之筆談書法 10 美的考索(第2版、上下)-中国美学範畴叢書 40 硯辺余墨 中国書法芸術論集 11 神思:芸術的精霊(第2版)-中国美学範畴叢書 41 中国書法与古文字研究 12 虚実掩映之間(第2版)-中国美学範畴叢書 42 墨香佛音 敦煌写経書法研究 13 雅論与雅俗之辨(第2版)-中国美学範畴叢書 43 晋 王義之 快雪時晴帖 14 芸味説(第2版、上下)-中国美学範畴叢書 44 宋 蘇軾黄庭堅蔡襄米芾四家小品	
9 中国美学範畴叢書之三 - 和:審美理想之維 39 林散之筆談書法 10 美的考索(第 2 版、上下) - 中国美学範畴叢書 40 硯辺余墨 中国書法芸術論集 11 神思:芸術的精霊(第 2 版) - 中国美学範畴叢書 41 中国書法与古文字研究 12 虚実掩映之間(第 2 版) - 中国美学範畴叢書 42 墨香佛音 敦煌写経書法研究 13 雅論与雅俗之辨(第 2 版) - 中国美学範畴叢書 43 晋 王義之 快雪時晴帖 44 崇咏説(第 2 版、上下) - 中国美学範畴叢書 44 宋 蘇軾黄庭堅蔡襄米芾四家小品	
10 美的考索(第2版、上下) - 中国美学範畴叢書 40 硯辺余墨 中国書法芸術論集 11 神思:芸術的精靈(第2版) - 中国美学範畴叢書 41 中国書法与古文字研究 12 虚実掩映之間(第2版) - 中国美学範畴叢書 42 墨香佛音 敦煌写経書法研究 13 雅論与雅俗之辨(第2版) - 中国美学範畴叢書 43 晋 王義之 快雪時晴帖 14 芸味説(第2版、上下) - 中国美学範畴叢書 44 宋 蘇軾黄庭堅蔡襄米芾四家小品	
11 神思:芸術的精霊(第2版) -中国美学範畴叢書 41 中国書法与古文字研究 12 虚実掩映之間(第2版) -中国美学範畴叢書 42 墨香佛音 敦煌写経書法研究 13 雅論与雅俗之辨(第2版) -中国美学範畴叢書 43 晋 王義之 快雪時晴帖 14 芸味説(第2版、上下) -中国美学範畴叢書 44 宋 蘇軾黄庭堅蔡襄米芾四家小品	
12 虚実掩映之間 (第 2 版) - 中国美学範畴叢書 42 墨香佛音 敦煌写経書法研究 13 雅論与雅俗之辨 (第 2 版) - 中国美学範畴叢書 43 晋 王義之 快雪時晴帖 14 芸味説 (第 2 版、上下) - 中国美学範畴叢書 44 宋 蘇軾黄庭堅蔡襄米芾四家小品	
13 雅論与雅俗之辨 (第 2 版) - 中国美学範畴叢書 43 晋 王義之 快雪時晴帖 14 芸味説 (第 2 版、上下) - 中国美学範畴叢書 44 宋 蘇軾黄庭堅蔡襄米芾四家小品	
14 芸味説(第2版、上下)-中国美学範畴叢書 44 宋 蘇軾黄庭堅蔡襄米芾四家小品	
15 中国美学範畴叢書之八-意象範畴的流変 45 宗白華美学思想研究-中国現代美学名	
	家研究叢書
16 中国美学範畴叢書之七-興:芸術生命的激活 46 蔡元培美学思想研究-中国現代美学名	家研究叢書
17 中国美学範畴叢書之四-原創之气 47 梁啓超美学思想研究-中国現代美学名	家研究叢書
18 中国美学範畴叢書之一-美在自然 48 劉熙載及其文芸美学思想-揚泰文庫.	審美文化系列
19 中国美学範畴叢書之五-因動成勢 49 王国維美学思想研究-中国現代美学名	家研究叢書
20 中国美学範畴叢書之十-雄渾与沈郁 50 朱光潜美学思想研究-中国現代美学名	家研究叢書
21 正変通変新変(第2版、上下) - 中国美学範畴叢書 51 視覚形式的美学研究 - 芸術与美学文庫	. 学術系列
22 志情理:芸術的基元(第2版) - 中国美学範畴叢書 52 東方書法審美論 - 東方芸術審美論叢	
23 中国美学範畴叢書. 第2輯之一-美的考索 53 李沢厚美学思想述評	
24 心物感応与情景交融 - 中国美学範畴叢書 第2輯 54 气的思想与中国書法 - 芸術与美学文庫	. 学術系列
25 大音希声:妙悟的審美考察-中国美学範畴叢書 第2輯 55 漢代造型芸術及其精神-芸術与美学文	庫. 学術系列
26 中国美学範畴叢書. 第2輯之二-情志理:芸術的基元	
27 中国美学範畴叢書. 第2輯之八-清淡美論辯析	
28 中国美学範畴叢書. 第2輯之五-神思:芸術的精霊	
29 中国美学範畴叢書. 第2輯之十-芸味説	
30 中国美学範畴叢書. 第2輯之三-正変. 通変. 新変	

Ⅴ. 審美術語用例集

凡例

- ・「審美術語用例集」は、大東文化大学人文科学研究所、中国美学研究班による、成復旺主編・中国人民大学出版社『中国美学範疇辞典』訳注第一冊(2003)~第七冊(2011)をもとに、書に関する内容を精査し、審美術語の用例を抽出したものである。
- ・各系列と範疇の関係は以下の通り。
- (第一系列)【主体】「心」…心/性/情/意/志/趣/趣興/意興/性霊
- (第二系列)【客体】「物」…形/質/象/景/境/天/道
- (第三系列)【審美関係】「感」…遊/体/品/悟/興/感
- (第四系列)【美】「合」…神/気/韻/味/意象/意境
- (第五系列)【形態】「品」(品格・品級) …和/自然/天籟/陽剛と陰柔/豪放と婉約/沈 着痛快と優游不迫
- ・「系列番号」の「系列」は修正版『中国美学範疇体系図』の第一~第五系列を表し、「番号」は各系列の範疇語に附した通し番号を表している。系列は漢数字、番号は算用数字で表記した。
 - (例) 一/ 0 は第一系列の「心」をさす。
- ・修正版『中国美学範疇体系図』の第一~第五系列に挙げられている範疇語を「大分類」と し、他の言葉と結びついた範疇語を「小分類」として区別した。
- ・「辞典番号」は『中国美学範疇辞典』訳注に収録する範疇語の通し番号を表す。
- ・「辞典範疇」は『中国美学範疇辞典』訳注に収録する範疇語を表す。
- ・「訳注冊数」、「訳注頁数」は『中国美学範疇辞典』訳注の冊数、頁数を表す。
- ・「用例原文」は『中国美学範疇辞典』に引かれる書論および書に言及する文章を抽出した もので、該当する範疇語には下線を引いた。
- ・『中国美学範疇辞典』訳注に引く文章が、原文と文字の異同がある場合には()内に注記した。
- · その他に関する事項は「備考」欄に表記した。

無
奁
Щ
ᇤ
患

EL/

a 表								· 丰。							
								原典未詳。							
用例原文		余志学之年、留心翰墨。味鍾張之余烈、相義献之前規、極慮専構、 時途二紀、…観天懸針、垂露之異、奔雷墜石之奇、湖飛膨駭之資、 鸞釋蛇驚之穂…東晋士人、互相陶泽。至於王謝之族、都頗之倫、縦 不尽其神奇、咸亦挹其風味。去之而滋永、斯道逾微。	文則教言乃成其意、書則一字已見其心。…考其法意所由、徒心者為上、 從眼者為下。…雖功用多而有声、終性情少而無象、同乎糟粕、其味 可知。不由靈台、必乏神気。	書道之妙在柱情、能在形質。然性情得於 <u>心</u> 而離名。形質当於目而有 拠、故擬与察皆形質中事也。	学書時時臨摹、可得形似。大要多取古書細看。令入神、乃到妙処。 惟用心不維、乃是入神要路。	凡人各殊気血、異筋骨、心有疎密、手有巧拙。	観書切相家閱人、得其心而後形色気骨可得而知也。	资企違思。	得之於心、応之於手。	欲書之時、当収視反應、總慮緣神、心正気和、則契於妙。書道玄妙、必資神遇、不可以力求也。機巧必須心悟、不可以目取也。心悟非心、合於妙也。仮華転心、妙非毫端之妙。学者心悟於至道、則書契於無為。苟涉浮華、終懵於斯理也。	初学不外臨藥。臨書得其筆意、攀得其間架。臨藥既久、則莫如多看。 多悟、多商量、多変通。坡翁学書、曾将古人字帖應精響間、觀共拳 止動構、心拳手道、得其大意。此中有人、有我、所謂学不鄉師也。 沒有有句云、詩不求工学不治、天真爛漫是吾師。古人用心不同、故 张出人頭鬼。余會調臨藥字中之字、多会福即字中有字、字外 有字、全従康処养精神。彼鈔帖、画帖者何曾夢見。	字雖有質、跡本無為。稟陰陽而動静、体万物以成形、達性通変、其 常不主。故知書道玄妙、必資神遇、不可以力求也。機巧必須 <u>心</u> 悟、 不可以目取也。	可以心契、非可言宜。	夫字以神為精魂。神若不和、則字無態度也。以心為筋骨。心若不堅、 則字無勁健也。以副毛為皮膚。副若不円、則字無温潤也。	心不厭精、手不忘熱。若運用尽於精熱、規矩關於胸襟、自然容与徘徊、意先筆後、瀟洒流落、翰逸神飛。
篇名				8 三子間	書贈福州陳 継月		為張潜夫書 官法帖			製物					
= 4		舞	大 羅	安呉論書	山谷集	非草書	広川書跋	不明	述張長史筆 法十二意	筆題壽	臨池管見	筆髓論	文字醫	置	想出
人名 (著者名)		孫過庭	張懐瓘	包世臣	黄庭堅	趙壹	重道	虞世南	顏真卿	虞世南	周星蓮	属世南	避緣避	唐太宗	孫過庭
時代	東/性霊	血	쇹	拒	₩	後漢	₩	垂	垂	鱼	無	星	車	唐	鱼
訳注 頁数	與/意興	62	63	216	367	13	29	33	74	91	120	134	146	286	376
訳注 卷数	趣/趣興		-			2	2	က	က	က	6	3	3	4	4
辞無	情/意/志/	举	世	形質	形包と 立	寒	気骨	視を収め 聴を反す	柜	妙厝	悟入	神通	心契	温潤	自然
群 番 号	/	1-001	1-001	1-028	1-057	1-061	1-066	2-009	2-014	2-015	2-016	2-018	2-023	3-095	3-118
小分類 範疇名	[√ı]	Ų	ų	ڼ	ų	Ų	ý	Ų	Ų	Ų	Ą	Ų	্দ	Ų	ڼ
小舗															
大分類 小 範疇名 範	系列) [主体]	ź	Ų	ų	ų	Ų	٠	Ų	Ų	٠́	ŕ	Ų	Ų	Ų	ڼ

					「字」は「筆」 の誤りか。	原典未詳。													
有動於心、必於草書焉発之。	有動於心、必於草書焉発之。	是其寫心,必泊然無所起。其於世、必淡然無所噜。泊與淡相遭、顏 墮委瞻潰敗不可収拾。	不得其心、而遂其跡、未見其能也也。	有動於心、必発於書。	<u>心</u> 正期 今 正。	心手随意。	欲書之時、当収視反聴、絶慮凝神、心正気和、則契於妙。書道玄妙、 必資神遇、不可以力求也。機巧必須 <u>心悟</u> 、不可以目取也。 <u>心悟</u> 非心、合於妙也。仮筆転心、妙非毫端之妙。学者 <u>心悟</u> 於至 道、則書契於無為。苟涉浮華、終懵於斯理也。	凡作書、要布置、要神彩。布置本乎運心、神彩生於運筆。	学書須是収書人真跡佳妙者、可以評視其先後肇勢軽重往復之法、若 只看碑本、別惟得字画、全不見其筆法神気、終離精進。 又学時不在旋看字本、逐画臨版、但貴以行立坐臥常諦玩、経目 <u>著心、</u> 人之、自然有倍入処。信意運筆、不覚得其精微、斯為	字雖有質、跡本無為。稟陰陽而動静、体万物以成形、達性通変、其 常不主。故知書道玄妙、必資神遇、不可以力求也。機巧必須心悟、 不可以目取也。	書者、散也。欲書先散懷抱、任情恣 <u>性</u> 、然後書之。	文則数言乃成其意、書則一字已見其心。考其法意所由、徒心者為上、從眼者為下。雖功用多而有声、終性情少而無象、同乎糟粕、其味可知。不由霊台、必乏神気。	書道之妙在 <u>性情</u> 、能在形質。然 <u>性情</u> 得於心而難名。形質当於目而有 拠、故擬与察皆形質中事也。	形質具矣、然後求性情。	不得古人形質、無自得性情也。	書道之妙在 <u>性情</u> 、能在形質。然 <u>性情</u> 得於心而難名。形質当於目而有 拠、故擬与察皆形質中事也。	形質具矣、然後求 <u>性情</u> 。	葦間先生(姜寢英)毎臨帖多佳、能以自家 <u>性情</u> 、合古人神理。不似 而似、所以妙也。	書有性情別筋力之屬也。
送高開上人 序	送高開上人 序	送高開上人 序	送高開上人 序	道臻師画墨 竹序	巻165列伝 第115		契妙		学書須観真迹				参 三子問	行草	学叙	参 三子問	行草		中和
韓昌黎文集	韓昌黎文集	韓昌黎文集	韓昌黎文集	山谷集	無	不明	筆髓論	書法約言	負喧野録	養船	筆	編集	芸舟双揖	広芸舟双揖	広芸舟双揖	芸舟双揖	広芸舟双揖	頻羅庵論書	書法雅言
韓愈	韓愈	韓愈	韓愈	黄庭堅	柳公権	不明	虞世南	宋曹	范成大	虞世南	蔡邕	張懐瓘	包世臣	康有為	康有為	包世臣	康有為	梁同書	項穆
車	車	血	唐	₩	血	不明	垂	無	南宋	血	後漢	血	無	無	無	無	無	崇	明
141	199	221	221		2	132	16	326	115	134	186	63	216	217	217	346	346	374	167
22	2	2	2	7	7	7	3		3	6	9				_	н	_	1	7
ý	発債	動と静	動と静	心声心画	心声心画	体勢	妙悟	本参	悟入	型	解衣紫礴	举	形質	形質	形質	形と神	形と神	不似之似	豊肉微骨
4-024	4-042	4-046	4-046	5-001	5-001	5-025	2-015	1-051	2-016	2-018	4-111	1-001	1-028	1-028	1-028	1-056	1-056	1-059	5-034
Ų	Ų	Ų	Ų	ų	ų	Ų	予格	運心	巻	型	類	村	在情	性情	性情	性情	性情	性情	性情
Ų	ý	Ų	ý	ý	Ų	Ų	ú	Ų	Ų	型	体	軐	輧	輧	輧	輧	种	性	챞
-/ 1	-/ 1		-/ 1			1/1	-/ 1	-/ 1	-/ 1	-/ 2	-/ 2	_/ 2	-/ 2	-/ 2	-/ 2	-/ 2	-/ 2	-/ 2	-/ 2

真以点面為形質、使転為 <u>替性、</u> 草以点面為 <u>增性</u> 、使転為形質。草乖 使転、不能成字、真虧点面、猶可記之。	書之形質如人之五官四体、書之 <u>情性如人之作止語點。必如相人書所</u> 謂五官成、四体称、乃可謂形質完善、非是則為缺陥。必如礼経所謂 九容、乃得性情之正、非是則為邪辭。	其以点面為形質、使転為借性、草以点面為 <u>情性</u> 、使転為形質。草乖 使転、不能成字、真虧点面、繪可記文。	書之形質加人之五官四体、書之 <u>情性如人之作止語點。必如相人書所</u> 謂五官成、四体称、乃可謂形質完善、非是則為缺陥。必如礼経所謂 九容、乃得性情之正、非是則為邪僻。	僧智永書、雖気骨清健、大小相雑、如十四五貴胄 <u>福性</u> 、方循켍墨、 忽越規矩。	. 為也有道、利害必明、無遭鋼鍊。 <u>情</u> 炎於中、利欲斗進。有得有喪、 勃然不釈、然後一決於書、而後也可幾也。	. 為旭有道、利害必明、無遭鋼鍊。 值炎於中、利欲斗進。有得有喪、 勃然不釈、然後一決於書、而後旭可幾也。	字外 <u>情</u> 多日茂。	書者、散也。欲書先散懷抱、任 <u>情</u> 恣性、然後書之。	真以点面為形質、使転為惰性、草以点面為 <u>惰性</u> 、使転為形質。草乖 使転、不能成今、真虧点面、繪可記文。	書之形質如人之五官四体、書之 <u>借性</u> 如人之作止語默。必如相人書所 謂五官成、四体称、乃可謂形質完善、非是則為缺陥。必如礼経所謂 九容、乃得性情之正、非是則為邪僻。	真以点画為形質、使転為 <u>情性、</u> 草以点画為情性、使転為形質。草乖 使転、不能成字、真虧点画、繪可記文。	書之形質如人之五官四体、書之 <u>惰性如人之作止語點。必如相人書所</u> 謂五官成、四体称、乃可謂形質完善、非是則為缺陥。必如礼経所謂 九容、乃得性情之正、非是則為邪聯。	文則数言乃成其意、書則一字已見其心。考其法意所由、從心者 為上、従眼者為下。雖功用多而有声、終 <u>性情</u> 少而無象、同乎糟 粕、其味可知。不由靈台、必乏神気。	書道之妙在 <u>性情</u> 、能在形質。然 <u>性情</u> 得於心而難名。形質当於目而有 拠、故擬与察皆形質中事也。	形質具矣、然後求 <u>性情</u> 。	不得古人形質、無自得性情也。	書道之妙在 <u>性情</u> 、能在形質。然 <u>性情</u> 得於心而難名。形質当於目而有 拠、故擬与察皆形質中事也。	形質具矣、然後求 <u>性情</u> 。	葉間先生 (姜葭英) 毎臨帖多佳、能以自家 <u>性情</u> 、合古人神理。不似 而似、所以妙也。	書有性情即筋力之属也。
	答熙載九問		答熙載九問		送高開上人 序	送高開上人 序				答熙載九問		答熙載九問		答三子問	行草	学叙	答三子問	行草		中和
書籍	芸舟双揖	粗	芸舟双揖	統書評	韓昌黎文集	韓昌黎文集	述書賦	無點	維	芸舟双揖	舞	芸舟双揖	文字器	芸舟双揖	広芸舟双揖	広芸舟双揖	芸舟双揖	広芸舟双揖	頻羅庵論書	書法雅言
孫過庭	包世臣	孫過庭	包世臣	米帯	韓愈	韓	纖纖	蔡邕	孫過庭	包世臣	孫過庭	包世臣	張懷瓘	包世臣	康有為	康有為	包世臣	康有為	梁同書	項穆
唐	無	車	無	北宋	聖	聖	聖	後漢	聖	無	聖	粔	쇹	無	無	清	無	無	無	明
216	216	346	346	62	199	210	172	186	216	216	346	346	63	216	217	217	346	346	374	167
1	1			2	1		4	9		П	-1	П	П	-1	1		1	1		7
形質	形質	形と本	帯と本	気骨	発債	顛狂	秀麗	解衣紫礴	形質	形質	形と神	形と神	举	形質	形質	形質	形と神	形と神	不似之似	豊肉微骨
1-028	1-028	1-056	1-056	1-066	1-042	1-045	3-058	4-111	1-028	1-028	1-056	1-056	1-001	1-028	1-028	1-028	1-056	1-056	1-059	5-034
情性	有	青性	和	編件	讏	讏		丰	肯性	哲	请性	新	新	新	性情	性情	性情	性情	佐備	性情
性	性	*	輧	#	集	丰	丰	事	丰	華	丰	華	華	丰	無	事	集	垂	無	丰
-/ 2	7 / -	-/ 2	-/ 2	-/ 2	-/ 3	-/ 3	-/ 3	-/ 3	-/ 3	-/ 3	-/ 3	-/ 3	-/ 3	-/ 3	-/ 3	-/ 3	-/ 3	-/ 3	-/ 3	-/ 3

以筋骨立形、以 <u>神情</u> 潤色。	初学之士、先立大体、然後定其筋骨、次又尊其威騰、 然後審其 <u>神情</u> 、喉蹙単疊、廻帯翻蔵。機輔円融、風度灑落。或字餘 而勢尽、或筆虧而意連、平順而凛鋒芒、健勁而融圭角、引伸而触類、 書之能事畢矣。	文則教言乃成其意、書則一字已見其心。考其法意所由、從心者為上、從服者為下。雖功用多而有声、終性情少而無象、同乎糟粕、其味可知。不由霊台、必乏神気。	演隸之不可思讓処、只是硬拙、初無布置等当之意、凡偏旁左右、宽 窄疏密、信手行去、一派天機。今所行聖林梁鵑碑、如墼模中物、絶 無風味、不知為誰翻摭者、可脈之甚。	和学之士、先立大体、然後定其筋骨、次又尊其威騰、 然後審其神情、戰蹙単疊、廻帯翻藏。機輔円融、風度灑落。或字餘 而勢尽、或筆虧而臺連、平順而凛鋒芒、健勁而融圭角、引伸而触類、 書之能事畢矣。	筆在指端則掌康、運動適<u>意</u>、騰羅頓挫、生気在 焉。	崔子玉書如危峰阻日、孤松一枝、有絶望之意。		書法貴藏鋒、然不得以模糊為藏鋒。須用筆如太阿馴馥之 <u>意、蓋以勁</u> 利取勢、以虚和取韻。	学書須是収售人真跡佳妙者、可以詳視其先後雖勢輕重往復之法、若 只看碑本、則惟得字画、全不見其筆法神気、終雕精進。 又学時不在旋看字本、逐画臨做、但貴以行立坐臥常諺玩、経目著心、 久之、自然有悟入処。信臺運筆、不覚得其精徵、斯為善学。	几字、毎落筆皆從点起。点定、則四面皆円、筆有主宰、不致偏枯草率。波折鉤勒、一気相生、風骨自然逾勁。董文敏劃、加大力人通身是力、匈輒能起。又云、自収自到、自起自結。皆此意也。褚河南行書、趙文敏行楷、細参自能悟入。	初学不外臨馨。臨書得其筆 <u>意</u> 、摹得其間架。臨馨既久、則莫如多看、 多悟、多商量、多変通。坡翁学書、曾将古人字帖屬語機間、觀其等 止動静、心摹手道、得其大 <u>意。</u> 此中有人、有我、所謂学不純師也。 又曾有句二、帝宗文二字不奇、天真爛漫是吾師。古人用心不同、故 能比人頭地。余鲁謂臨摹不過学字中之字、多会梧則字中有字、字外 有字、全従虚処着精神。彼鈔帖、画帖者何曾夢見。	然神游 象外、 方能 <u>意</u> 到圜中。	夫面者与六籍同功,四時并遇, 発于天然, 非由述作。古先望(*)人、受命応錄、則有值字效靈、龍図呈宝。危緣氏洛袋河中、典籍図画萌卖。軒轅氏得于温洛中、史皇耆趙状焉。是時也、書画同体而未分、象創鑑創而潛略。無以伝其意、故有書、無以見其形、故有画、天地聖人之 <u>意</u> 也。
	有还		雑記言	巧序	張懷瓘論執 筆		指意		学書須観真 迹				
文分影	書法雅言	文字獸	霜紅龕集	書法雅言	御定佩文斎 書画譜	古今書評	筆髓論	評書法	負喧野録	臨池管見	臨池管見	書画伝習録	歷代名画記
張懷瓘	項穆	張懷瓘	伸巾	項穆	張懷瓘	袁昂	虞世南	董其昌	范成大	周星蓮	周星蓮	王綾	張彦遠
讏	明	垂	無	田	쇹	総	車	崩	框	無	振	明	电
331	331	63	62	331	78	45	16	102	115	119	120	155	287
	1			-	2	က	3	3	m	m	က	က	m
神情	幸	举	風味	车	生気	떕	砂厝	妙悟	悟入	悟入	悟入	超以象外、 得其環中	天と人
1-053	1-053	1-001	1-003	1-053	1-070	2-013	2-015	2-015	2-016	2-016	2-016	2-026	2-063
神	神情	逌	極	襭	縆	縆	ә	ә	钷	御	枙	縆	鞭
寷	丰	쳳	極	極	御	幯	鞭	讏	倾	倾	쳳	縆	和範
E /-	—/ 3	-/ 4	4 /-	4 /-	4 /-	4 /-	-/ 4	-/ 4	4 /-	4 /-	-/ 4	4 /-	4 /-

		原典未詳。									原典未詳。									
		原典									原典									
古人於書、大抵晚歳帰於平淡、而合淨収斂、多若不経 <u>意</u> 不用力者、 無復少年習気矣。	須得書 <u>意</u> 転深、点画之間皆有 <u>意</u> 、自有言所不尽。	<u></u>	心不厭精、手不忘熱。若運用尽於精熱、規矩關於胸襟、自然容与徘徊、 <u>意</u> 先筆後、瀟洒流落、翰逸神飛。	(鎮·王) 遺跡、偶然之作、蓋不経 <u>意</u> 肆筆為之、人工適符天巧, 奇妙出焉。	須得書 <u>意</u> 転深、点画之間皆有 <u>意</u> 、自有言所不尽。	<u>意</u> 在筆前、 然後作字。	先学問架、古人所謂結字也。間架既明、則学用筆。間架可看石碑、 用筆非真迹不可。結字、晋人用理、唐人用法、宋人用 <u>意</u> 。	古人論書、以章法為一大事。蓋所謂行問茂密是也。余見米縣小楷作 西國雅集図記、是納扇、其直如弦。此必非有他道。乃平日留意章法 耳。右軍蘭亭級、章法為古今第一。其字皆映帶而生、或小或大。随 手所如。皆入法則。則所以為神品也。	不欲多露鋒鋩、露則臺不持重。不欲深藏圭角、藏則体不精神。	親其体勢、得之自然、 <u>意不在乎</u> 筆墨、若高逸之士。雖在布衣、有做 然之色。	小手随意。	其初非用意、而逸筆余興、淋漓揮酒、或師或蘭、百態權生、披卷発 函、爛然在目、使人縣見緣絕、徐而視之、其 <u>意應</u> 愈無窮尽。	古人写字、政如作文。有字法、有章法、有篇法。終篇結構、首昆相応。故云、一点成一字之規、一字乃終篇主。起伏聪顕、陰陽向背、皆有 <u>意應</u> 。	唐言結構、宋尚 <u>意態</u> 。	殷鈞書、如高麗使人、抗浪甚有 <u>意気</u> 、滋韻終乏精味。	<u>意気</u> 蜜麗、若飛鴻鵔海、舞鶴遊天。	文則数言乃成其意、書則一字已見其心。考其法意所由、從心者 為上、従眼者為下。雖功用多而有声、終性情少而無象、同乎糟 粕、其味可知。不由霊台、必乏神気。	風神者、一須人品高。二須師法、古。三須孫筆佳。四須險勁。五須 高明。六須測沢。七須向背得宜。八須時出新意。自然長者如秀整之 土、短者如精悍徒。瘦者如山澤之癱、肥者如貴游之子。勁者如武夫、 媚者如美女。發斜如酔仙、端楷如賢士。	並不述用筆之妙。及乎蔡邕張索之輩、鍾繇衛王之流、皆 <u>造意</u> 精微、 自悟其旨也。	生意内凝而生気外敝。
				書学詳説										尊碑				風神	叙体	響
承晋斎積閒 錄	自警告	不明	粗	春雨雑述	自論書	題衛夫人筆 陣図後	鈍吟書要	画禅室随筆	統書譜	華	不明	集古錄跋尾	法書通釈	広芸舟双楫	古今書評	古今書評	文字論	統書譜	筆髓論	芸舟双楫
警	王羲之	不明	孫過庭	解縉	王羲之	王羲之	馮班	董其昌	姜夔	張懐瓘	不明	欧陽脩	張紳	康有為	袁昂	袁昂	張懷瓘	姜夔	虞世南	包世臣
非	声	不明	鱼	明	東晋	東晋	無	田	南宋	車	不明	北宋	明	無	涨	鯲	量	南	串	無
182	330	357	376	389	168	176	83	36	144	131	132	383	1.1	22	53	13	63	338	91	193
4	4	4	4	4	2	rc	9	9	9	7	7	4	9	9		2	П	-	က	4
平淡	虚と実	薬と密	自然	自然	言と意	意存筆先, 画尽意在	44	章	蔵と露	本	体勢	自然	結構	結構	举	美	举	風神	妙悟	枯槁
3-061	3-108	3-114	3-118	3-118	4-034	4-035	4-080	4-083	4-095	5-025	5-025	3-118	4-078	4-078	1-001	1-061	1-001	1-055	2-015	3-066
쳳	縆	極	縆	縆	縆	御	細	钷	讏	細範	幯	意態	意態	意態	意気	意気	法意	梅	祖	生意
쳳	幯	ә	縆	縆	逌	縆	縆	縆	讏	縆	縆	類	道	讏	쳳	讏	쳳	钷	縆	徳
-/ 4	4 /-	4 /-	4 /	4 /	-/ 4	4 /-	4 /-	-/ 4	-/ 4	4 /-	4 /-	-/ 4	-/ 4	4 /	-/ 4	4 /	-/ 4	-/ 4	4 /-	-/ 4

我書意造本無法、点画信手煩推求。胡為議論独見假、隻字片紙皆橫収。	又曰「巧謂布置、子知之乎。」曰「豈不謂欲書先預想字形布置、令 其平穏、或 <u>意外</u> 生体、令有異勢。是之謂巧乎。」曰「然。」	余志学之年、留心翰墨。味鍾張之余烈、挹羲献之前規、極慮專精、 時逾二紀、…觀夫懸針、垂露之異、奔雷墜石之奇、鴻飛獸駭之資、 鸞舞蛇戆之態…東晋士人、互相陶泽。至於王謝之族、都庾之倫、縦 不尽其神奇、咸亦挹其鳳珠。去之而滋永、斯道逾徽。	歡跂鳥時、志在飛移、狡兔暴駭、将奔未馳。	岑草書縦逸不拘、蓋有自得之 <u>趣</u> 。	厥用既弘、体象有度。쉃若星腳、欝若雲布。或穹窿依瞭、或櫛比鍼列。或砥平細直、或蜒釋展。或長邪角趣、或規旋矩折。修短相副、賦体同数。奮筆軽拳、離而不絶、穢波濃点、錯落其間。	<u> </u>	字画疏処可以走馬、密処不使透風。常計白以当墨、 <u>奇趣</u> 乃出。	<u> </u>	字画疏処可以走馬、密処不使透風。常計白以当墨、 <u>奇趣</u> 乃出。	字画疏処可以走馬、密処不使透風。常計白以当墨、 <u>奇趣</u> 乃出。	なし	なし	なし		自非通霊感 <u>物</u> 、不可与談斯道	書与画異 <u>形而同品、画之意象変化、不可勝</u> 窮、約之不出神能逸妙四 品而已。	書与画同出。画取形。書取象。画取多。書取少。凡象形者、皆可画也。不可画。則無其書矣。然書窮変、故画雖取多。而得算常少。書雖取少。而得算常多。六書者。皆象形之変也。(象形第一)	為書之体、須入其逐。若坐若行、若飛若動、若往若來、若臥若起、 若愁若喜、若虫食木葉、若利劍長矛、若強弓硬矢、若水火、若雲霧、 若日月。縱橫有可象者、方得謂之書矣。	至若数画並施、其形各異、衆点斉列、為体互乖、一点成一字之規、 一字乃終篇之準、違而不犯、和而不同。	学書時時臨業、可得形 <u>似。大要多取古書細看。令入神、乃到妙処。</u> 惟用心不維、乃是入神要路。	書之妙道、神彩為上、 <u>形質</u> 次之、兼之者方可紹於古人	真以点画為 <u>形質</u> 、使転為情性、草以点画為情性、使転為 <u>形質</u> 。草乖 使転、不能成字、真虧点画、繪可記文。
							述書上		述書上	述書上						丰 概	六書略					
石蒼舒酔墨 堂	述張長史筆 法十二意	親田	四体書勢	書史会要	禁	観鍾繇書法 十二意	芸舟双揖	述書賦	芸舟双揖	芸舟双揖					筆陣図	洪	超	編	粗	編	筆意賛	細細
蘇軾	顏真卿	孫過庭	衛恒	陶宗儀	凝調	梁武帝	包世臣	資業	包世臣	包世臣					衛夫人	劉熙載	鄭樵	茶問	孫過庭	黄庭堅	王僧虔	孫過庭
光米	血	쇹	田瑞	明	後	账	無	齨	無	無					東	無	₩	澎	ቍ	€₩	革	鱼
164	82	79	124	260	148	324	277	622	330	98					217	226	240	240	21	367	216	216
2	9	-	7	3	-1		23	4	4	9				天/道	9		1	-	4		1	1
意造	布置	举	豫	巤	¥	幸	奇趣	鯅	虚と実	布置				象/景/境/								
4-033	4-081	1-001	5-024	2-053	1-019	1-050	2-061	3-093	3-108	4-081				一質	4-116	1-031	1-034	1-034	3-003	1-056	1-028	1-028
過	意外	Ηá	艳		角	巧趣	中瀬	夢	売	- 少期				s】「物」…形/	· ·	彩	彩	炭	彩	形包	形質	形質
縆	縆	艳	艳	働	巤	攤	槲	強	角	瀬	趣興	意興	体制	列) [客体]	捌	光	彩	坐	光	光	彩	沿
4 /-	4 /	-/ 5	-/ 5	9 /	9 /	9 /	9 /	9 /	9 /-	9 /	_/ _/	8 /	6 /	(第二系列)	0 /1	=/ 1	=/1	=/1	=/ 1	=/1	=/1	=/ 1

書之 <u>死質如人之五官四体、書之情性如人之作止語點。必如相人書所</u> 謂五官成、四体称、乃可謂 <u>形質</u> 完善、非是則為缺陥。必如礼経所謂 九容、乃得性情之正、非是則為邪辭。	書道之妙在性情、能在 <u>形質。</u> 然性情得於心而難名。 <u>形質</u> 当於目而有 拠、故擬与察皆 <u>形質</u> 中事也。	<u>形質</u> 具矣、然後求性情。	不得古人 <u>形質</u> 、無自得性情也。	書之妙道、神彩為上、 <u>形質</u> 次之	真以点面為 <u>形質</u> 、使転為惰性、草以点面為情性、使転為 <u>形質</u> 。	書道之妙在性情、能在 <u>形質</u> 。	書之 <u>形質</u> 如人之五官四体、書之情性如人之作止語黙。	<u>形質</u> 具矣、然後求性情。	真以点面為 <u>形質</u> 、使転為情性、草以点面為情性、使転為 <u>形質</u> 。革乖 使転、不能成字、真虧点画、緒可記文。	書之形質如人之五官四体、書之情性如人之作止語點。必如相人書所 謂五官成、四体称、乃可謂 <u>形質</u> 完善、非是則為缺陥。必如礼経所謂 九容、乃得性情之正、非是則為邪辭。	書道之妙在性情、能在 <u>形質。然性情得於心而難名。形質</u> 当於目而有 拠、故擬与察皆 <u>形質</u> 中事也。	形質具矣、然後求性情。	不得古人 <u>形質</u> 、無自得性情也。	書之妙道、神彩為上、 <u>形質</u> 次之	真以点面為 <u>形質</u> 、使転為情性、草以点面為情性、使転為 <u>形質</u> 。	書道之妙在性情、能在 <u>形質</u> 。	書之 <u>形質</u> 如人之五官四体、書之情性如人之作止語黙。	<u>形質</u> 具矣、然後求性情。	曲直在性情而達於 <u>形質</u> 。円扁在 <u>形質</u> 而本於性情。	聖人作易、立象以尽意、意先天、書之本也、象後天、書之用也。	書与画同出。画取形。書取鉴。画取多。書取少。凡象形者、皆可画也。不可画。則無其書矣。然書窮変、故画雖取多。而得算常少。書雖取少。而得算常多。六書者。皆象形之变也。(象形第一)	意先天書之本也。 象後天書之用也。	坡、谷苗公之詩、如米元章之字、雖筆力勁健、終有子路事夫子時 <u>気象。</u> 盛唐諸公之詩、如顏魯公書、既筆力雖壮、又 <u>気象</u> 源厚、其不同如此。	又詩之気象、猶字画然、長短肥瘦、清濁雅俗、皆在人性中流出。	「振衣千仞崗、濯足万里流」。作書須有此 <u>気象</u> 。	なし	なし
答熙載九間		行草	学叙			格三子間	答熙載九問	行草		答熙載九問	8 11 11 11	行草	学叙			答三子問	答熙載九問	行草	答三子問	書概	六書略	書概					
芸舟双楫	芸舟双楫	広芸舟双楫	広芸舟双楫	筆意賛	粗	芸舟双楫	芸舟双楫	広芸舟双楫	粗	芸舟双楫	芸舟双楫	広芸舟双楫	広芸舟双楫	筆意賛	舞曲	芸舟双楫	芸舟双楫	広芸舟双楫	芸舟双楫	芸概	判	芸概	答出継叔臨 安呉景僊書	木天禁語	字学憶参		
包世臣	包世臣	康有為	康有為	王僧虔	孫過庭	包世臣	包世臣	康有為	孫過庭	包世臣	包世臣	康有為	康有為	王僧虔	孫過庭	包世臣	包世臣	康有為	包世臣	劉熙載	鄭樵	劉熙載	厳羽	范棹	姚孟起		
粔	無	無	無	袏	恤口	無	崇	無	血	無	疟	無	無	英	桖	無	無	無	無	無	₩	無	南宋	比	無		
216	216	217	217	346	346	346	346	346	216	216	216	217	217	346	346	346	346	346		227	240		27	83			
1		1	1		П	_	1	-		-		_	1	1	-	1	_	-					2	2			
1-028	1-028	1-028	1-028	1-056	1-056	1-056	1-056	1-056	1-028	1-028	1-028	1-028	1-028	1-056	1-056	1-056	1-056	1-056	1-056	1-031	1-034	1-034	1-062	1-062	1-062		
形質	形質	形質	形質	形質	形質	形質	形質	形質	形質	形質	形質	形質	形質	形質	形質	形質	形質	形質	形質	豢	鉄	豢	気象	気象	気象		
岩	光	彩	彩	坐	彩	彩	坐	彩	魟	類	紅	氮	質	缸	魟	質	紅	魟	質	፠	鉄	፠	鉄	鉄	鉄	峇	境
=/ 1	=/ 1	=/1	1/1	1/1	1/1	1/1	=/1	1/1	2 / 1	2 /1	2 /1	2/1	<u> </u>	<u>/ 2</u>	1/2	=/ 2	2/1	1/2	=/ 2	2/1	8 /1	£ /1	£ /1	2/1	e /1	1 4	2 /1

書当选平自然。蔡中郎但謂書肇于自然。此立天以定人、尚未及乎由 人復天也。	自非通霊感物、不可与談斯 <u>道</u>		深識書者、惟 <u>観</u> 神彩、不見字形。	なし	書有老少、区別淺深、勢雖異形、理則同体。所謂老者、結構精密、 <u>体裁</u> 高古、嚴岫聳峰、旌旗列陣是也。所謂少者、気体充和、標格雅 秀、百般滋味、千種風流是也。	字之正者固多。若其偏側・裁斜、亦当随其字勢結体	蔡邕···工書絶世、尤得八分之精徽。 <u>体法</u> 百変、窮霊尽妙、独歩今古。	陸学士東之受於虞秘監、虞秘監受於永禅師。皆有 <u>体法</u> 。	能文章、書楷渔媚有 <u>体法</u>	字雖有質、跡本無為。稟陰陽而動静、 <u>体</u> 万物以為形。	李邕得其気而失於体格	至研精体勢、則無所不工	觀其体勢、得之自然、意不在乎筆墨、若高逸之士、雖在布衣、有做 然之也。	衛恒兼精 <u>体勢</u>	有若風行雨散、潤色開花、筆法 <u>体勢</u> 之中、最為風流者也	夫書之為 <u>体</u> 、不可專執。用筆之 <u>勢</u> 、不可一概	或体殊而勢接。若双樹之交葉	(查)道始習篆、患其 <u>体勢</u> 弱。有教以「撥鐙法」、仍双鉤用筆、経 半年始習熟、而篆体勁直。	<u>体勢</u> 雖涉奇怪、袤丈之字、略無怯渋、亦人所難	用筆雖古、 <u>体勢</u> 多怪	なし	康安吉云、夫未解書意者、一点一画、皆求象本、乃転自取制······終 其 <u>悟</u> 也。粗而能鋭、細而能址、長者不為有余、短者不為不足。	欲書之時、当収視反應、總慮緣神、心正気和、則契於妙。書道玄妙、 必資神遇、不可以力求也。機巧必須心悟、不可以目取也。小倍 非心、合於妙也。仮筆転心、妙非毫端之妙。学者心悟於至 道、則書契於無為。苟涉浮華、終懵於斯理也。	横巧必須 <u>心悟、</u> 不可以目取也。 <u>心悟</u> 非心、合於妙也。	自云得草書三昧。嘗観夏雲随風変化、頓有所 <u>悟</u> 、遂至絶妙	1,每十五站
青概					老少		条中		裴休伝	契妙												指意篇				
狀魔	筆陣図		書解		書法雅言	三十六年	書解	法書要録	新唐書	筆髓論	墨池琑錄	- 単断	量	書所	書議	玉堂禁経	書解	書史会要	書史会要	書史会要		筆髓論	羅羅	筆髄論	統書断	筆髓論
劉熙載	衛夫人		張懷瓘		項穆	欧陽詢	張懷瓘	張彦遠		虞世南	李煜	張懐瓘	張懐瓘	張懐瓘	張懐瓘	張懐瓘	張懐瓘	陶宗儀	陶宗儀	陶宗儀		虞世南	虞世南	虞世南	朱長文	虞世南
海	東晋		車		明	血	車	唐	北宋	車	南唐	靊	쇹	車	血	一世	齨	明	明	明		쇹	쇹	唐	₩	唐
282	217		325		71	83	88	88	88	20	19	131	131	132	132	132	132	132	132	132		16	91	91	93	100
3	9	興/殿	1		1	9	9	9	9	7	7	7	7	7	7	7	7	2	7	7		33	6	3	33	3
		体/品/悟/	神彩 (米)		滋味																	妙悟		砂厝	か 是	妙悟
2-063	4-116	担::	1-051		1-002	4-079	4-082	4-082	4-082	5-011	5-014	5-025	5-025	5-025	5-025	5-025	5-025	5-025	5-025	5-025		2-015	2-015	2-015	2-015	2-015
K	ূ	[審美関係] 「感」	観	瀬	体裁	結体	体法	体法	体法	*	体格	体勢	本	体勢		体勢	体勢	体勢	体勢	体勢	毌	崋	妙语	小悟	柜	中中
K	ূ		観	遊	*	本	林	体	体	体	本	*	畚	体	本	*	本	林	体	体	ᄪ	歫	布	뭠	늎	布
9 /=	2 / =	(第三系列)	<u>=</u> /1	≡/ 2	€/Ξ	£ /11	E/13	≡/3	≡/3	E / 1	e 111	£ /11	£ /1	E / 1	£ /11	£ /11	e /11	€/Ξ	≣/3	E / 1	₹/ ₹	€ / Ξ) 111	≅/ 2	2 /11	2 /11

学書須是収書人真跡佳妙者、可以詳視其先後筆勢軽重在復之法、若 只看碑本、則惟得字画、全不見其筆法神気、終難精進。 又学時不在旋看字本、逐画臨版、但貴以行立坐臥常諦玩、経目著心、 久之、自然有 <u>哲人</u> 処。信意運筆、不覚得其精微、斯為善学。	余学書幾二十年、所歷皆世人嗤笑睡棄之境。而不肯安於小成、故数 之従業、至今日乃 <u>覚有悟人</u> 処。倘亦禅家所謂漸修頓証之條乎。	几字、每落筆皆從点起。点定、則四面皆円、筆有主宰、不致偏枯草 率。波折鈎勒、一気相生、風骨自然逾勁。董文敏謂、加大力人通身 是力、倒輒能起。又云、自収自到、自起自結。皆此意也。褚河南行 書、趙文敏行楷、細参自能 <u>悟入</u> 。	初学不外隘拳。臨書得其筆意、攀得其間架。臨攀既久、則莫如多看、 多恆、多商量、多変通。玻翁学書、曾将古人字帖隱諸壁間、觀其拳 止動帶、心拳手追、得其大意。此中有人、有我、所謂學不維節也。 又當有句云、詩不求工学不希、天真爛漫是吾師。古人用心不同、故 在学、全從虚処着精神。彼珍昧、面帖者何曾夢見。	なし	なし		張芝鎮繇、巧趣精細、殆同 <u>楼神</u> 。	余志学之年、留心翰墨。味鍾張之余烈、挹羲献之前規、極慮專梢、 時逾二紀、…觀夫懸針、垂露之異、奔雷墜石之奇、鴻飛鰕駭之資、 鸞舞蛇驚之態…東晋士人、互相陶淬。至於王謝之族、都庾之倫、縦 不尽其 <u>神奇</u> 、咸亦挹其風味。去之而滋永、斯道逾徵。	書之妙道、神彩為上、形質次之	深識書者、惟觀神彩、不見字形。	荷屋(呉栄光)袴書 <u>神采</u> 雍容、気韻絶佳。	显	凡作書、要布置、要 <u>神彩</u> 。布置本乎運心、 <u>神彩</u> 生於運筆。	文則数言乃成其意,書則一字已見其心。…考其法意所由,從心者為上, 従眼者為下。…雖功用多而有声、終性情少而無象、同乎糟粕、其味 可知。不由靈台、必 <u>神気</u> 。	不由霊台、必乏 <u>神気</u>	以筋骨立形、以神情潤色
学 学 学 表 次 入	<u>徐</u> ゼ	以 李	<u>多多</u> 出又 體 在	*	*		- 選	《中驚人		践		昭	N.	女第旦	<u> </u>	Ā
負喧野録	初楼論書随 筆	臨池管見	臨池管見				親鍾繇書法 十二意	製量	筆高替	華	広芸舟双楫	青法	書法約言	繼	文字獸	文字醫
范成大	呉徳璇	周星蓮	周星蓮				京帝	孫過庭	王僧虔	張懐瓘	康有為	欧陽詢	光車	張懐瓘	張懐瓘	張懐瓘
南宋	無	無	海				継	쇹	南 香 ·	靊	無	量	海	血	靊	ഘ
115	118	119	120				320	79	325	325	325	326	326	63	328	331
3	3	က	m			意境		1				1			_	_
			晤入			/味/意象/	世	举						长		
2-016	2-016	2-016	2-016			/気/韻	1-050	1 -001	1-051	1-051	1-051	1-051	1-051	1-001	1-052	1-053
悟入	悟入	44人	<u>슈</u> 파	墨	巤	[合]…神/気	世	存		# ※ ※ ※ ※	₩ ※ ※	(米) (米)	華	華	神気	
竡	亜	坦	埋	海	凝	*	集	幸	幸	集	幸	華	集	≉	隶	隶
=/ 5	<u>=</u> / 5	2 /11	11/2	9 /11	2/1	(第四系列)	四/1	四/1	四/1	四/11	四/1	四/1	四/1	四/1	四/1	四/1

初学之士、先立大体、…然後定其節骨、…次又尊其威條、…然後審 其神情、喉塵草疊、廻帯翻礁。機軸円融、風度灑落。或字餘而勢尽、 或筆断而意運、平順而濃鋒芒、健勁而融圭角、引伸而強類、書之能 事畢矣。(『美術叢書』本では「取舎」には見えず、「巧序」に見える)	凛之以 <u>風神</u> 、温之以所潤。鼓之以枯勁、和之以開雅。	以風神骨気者居上、妍美功用居下	少(王羲之)筆迹渔瀾、独擅一家之美、天資自然、風神蓋代。	状貌顯而易明、 <u>風神</u> 隱而難弁。	<u>資運動於風神</u> 、頤浩然於潤色。	風神者、一須人品高。二須師法古。三須經維佳。四須陵勁。五須高明。六須淵沢。七須向背得宜。八須時出新意。自然長者如秀整之士、短者如用精悍徒。瘦者如山澤之權、肥者如貴游之子。勁者如武夫、媚者如美女。破斜如酔仙、端楮如賢士。	書之妙道、神彩為上、形質次之	学書時時臨擊、可得形似。大要多取古書細看。令入 <u>神、</u> 乃到妙処。 惟用心不維、乃是人 <u>神</u> 要路。	孫虔礼云,「蔡之者尚精、擬之者貴似」。凡臨古人、始必求其似、久 久剥換、遺貌取神、則相契在牝牡驪黄之外、斯為 <u>神似</u> 。宋人謂顔書 学褚、顔之与褚、絶不相似。此可牾臨古之妙也。	蔡邕書、骨気洞違、奏奏有袖	書必有 <u>神</u> 気骨肉血五者、欠一不為成書也。	欲書之時,当収視反聴, 總慮凝神,心正気和,則契於妙。書道玄妙、 必資神遇、不可以力求也。機巧必須心悟、不可以目取也。心悟 非心、合於妙也。仮華転心、妙非毫端之妙。学者心悟於至 道、則書契於無為。苟涉浮華、終懵於斯理也。	学書須是収書人真跡佳妙者、可以詳視其先後筆勢軽重往復之法、若 只看碑本、則惟得字画、全不見其筆法神気、終難精進。 又学時不在旋看字本、逐画臨版、但貴以行立坐臥常諦玩、経目著心、 久之、自然有悟入処。信意運筆、不覚得其精微、斯為善学。	文則数言乃成其意,書則一字已見其心。…考其法意所由,徒心者為上、 從眼者為下。…雖功用多而有声、終性情少而無象、同乎糟粕、其味 可知。不由靈台、必 <u>神気</u> 。	凝神静慮	欲書之時、当収視反聴、絶慮凝神、心正気和、則契於妙。書道玄妙、 必資神遇、不可以力求也。機巧必須心悟、不可以目取也。心悟 非心、合於妙也。仮筆転心、妙非毫端之妙。学者心悟於至 道、則書契於無為。苟涉浮華、終懵於斯理也。	王右軍書、如謝家子弟、縱復不端正者、爽爽有一種風気
	強	以	海少	状象	資	展 田 田 古 本 女	神	华		操	- 量で	欲必非道言答心、		文月 従間 可免	凝水	後名井河河	
取舎					4								学書須観真 迹				
書法雅言	書譜	書議	書議	文字器	書解	經十二	筆意賛	細	論書滕語	古今書評	東坡題跋	筆艇論	負喧野録	書	伝授訣	筆髄論	古今書評
王世貞	孫過庭	張懷瓘	張懐瓘	張懷瓘	張懷瓘	姜夔	王僧虔	黄庭堅	王澍	京品	蘇軾	虞世南	范成大	張懷瓘	欧陽詢	虞世南	東昂
明	車	齨	齨	垂	齨	₩	海朝·	€₩	谱	海 線 ・	北宋	坦	南	星	血	量	※ 報
331	337	337	337	337	337	337	346	367	368	13	14	16	115	63	34	91	13
1	1	_			_	1	-	н	1	7	2	33	3	1	3	3	2
							あい革	売食と 会 会	形 気と を 会	展	気	妙悟	悟入	举	絶慮凝神	妙悟	
1-053	1-055	1-055	1-055	1-055	1-055	1-055	1-056	1-057	1-057	1-061	1-061	2-015	2-016	1 -001	2-010	2-015	1-061
神情	風神	風神	風神	風神	風神	風神	革券	幸	神负	幸	華	型	英	神気	凝神	凝神	風気
集	集	≉	栞	≉	≉	幸	幸	幸	幸	幸	集	幸	幸	苹	栞	幸	鬞
四/1	四/1	四/1	四/1	四/1	四/1	四/1	四/1	四/1	四/1	四/1	四/1	四/ 1	四/ 1	四/1	四/1	四/1	四/2

蔡邕書、 <u>骨気</u> 洞達、爽爽有神	<u>意気</u> 策題、若飛鴻峻海、舞鶴游天	若適題居優、 <u>骨気</u> 将劣、譬夫芳林落藻、空照灼而無依、蘭沼漂漭漭、 徒青翠而奚託	風神 <u>骨気</u> 者居上、妍美功用者居下	書必有神気骨肉血五者、欠一不為成書也。	書家以豪邁有気、能自結撰為極則	右軍書「不言而四時之気亦備」	秦碑力勁、漢碑気厚、一代之書、無有不肖乎一代之人与文者	書之要、統於 <u>骨気</u> 二字。 <u>骨気</u> 而曰洞逢者、中透為洞、辺透為達。洞 違則字之疎密肥瘦皆善、否則皆病。	書要兼備陰陽二気。大凡沈著屈鬱、陰也、奇抜豪達、陽也	凡論書気、以土気為上。若 <u>婦気兵気村気市気匠気腐気槍気俳気江湖</u> 気門客気酒肉気 <u>藤荷気</u> 、皆士之棄也。	荷屋(呉栄光)榜書神采雍容、 <u>気韻</u> 絶佳。	学書生行筆、苟不知此、老死不免背聽。雖規模前人、点画不離法度、 要亦 <u>気韻</u> 各有所在、略不係其工拙也。	蓋專工 <u>気觀</u> 、則有傍風急雨之失。太守墨縄、則貽叉手並脚之機	每秉筆、必在円正。 <u>気力</u> 縱橫重軽凝神静慮。	<u>気力</u> 運厚可謂篆中之雄	作行草、気格雄健、与其文章相表裏	- 選相模做、而 <u>気格</u> 低下	蔡邕書、 <u>骨気</u> 洞違、爽爽有神	王僧虔書如王謝家子弟、縱復不端正奕奕、皆有一種風流 <u>気骨</u>	魏書似相家観人、得其心而後形色<u>気骨</u>可得而知也	僧智永書、雖 <u>気骨</u> 清健、大小相離、如十四五貴胄編性、方循縄墨、 忽越規矩。 (米芾に『続書評』という書論は無い。)	観魯公此帖、奇偉秀技、奄有魏晋隋唐以来風流 <u>気骨</u>	顏書惟蔡明遠序尤為沈古、米海岳一生不能仿佛、蓋亦謂学唐初諸公 書、稍乏 <u>気骨</u> 耳。
						書概	書概	書概	書概	書概					卷三十四雑 著評書					卷十為張潜 夫書官法帖		題顏魯公帖	
古今書評	古今書評	粗	書議	東坡題跋	容台集	芸概	洪概	崇觀	芸概	洪	広芸舟双楫	姑渓集	幸幸	伝受訣	端明集	宣和書譜	五雑俎	古今書評	古今書人優 劣評	広川書跋	統書評	山谷題跋	
袁昂	袁昂	孫過庭	張懐瓘	蘇軾	董其昌	劉熙載	劉熙載	劉熙載	劉熙載	劉熙載	康有為	李之儀	袁裒	欧陽詢	蔡襄		謝肇淛	袁昂	梁武帝	東源	米	黄庭堅	董其昌
南朝· 黎	南 歌	星	唐	北米	田	崇	無	排	崇	無	無	北条	元代	唐	光	*	明	南朝· 梁	南朝· 梁	₩	光	北宋	通
13	13	13	13	14	14	14	14	14	14	14	325	49	49	55	22	61	61	62	62	62	29	62	63
2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	-	2	2	2	2	2	2	2	2	2	23	2	2
											本粉 (米)												
1-061	1-061	1-061	1-061	1-061	1-061	1-061	1-061	1-061	1-061	1-061	1-051	1-063	1-063	1-064	1-064	1-065	1-065	1-065	1-065	1-065	1-065	1-065	1-065
骨気	意気	骨気	骨気	寒	寒	承	寒	骨気	魚	承	気韻	気韻	気韻	気力	気力	気格	気格	骨気	気骨	気骨	気骨	気骨	気骨
承	黑	気	魚	*	溪	承	*	気	泵	展	*	魚	承	気	黑	気	寒	気	気	黑	关	気	武
四/2	四/2	四/ 2	四/2	四/2	四/2	四/2	四/2	四/ 2	四/2	四/2	四/2	四/ 2	四/2	四/2	四/2	四/ 2	四/2	四/ 2	四/ 2	四/2	四/2	四/2	四/2

								沙雷至						多匹			~	劉			畿、、
書有老少、区別浅深、勢雖異形、理期同体。所謂老者、結構精密、 体裁高古、凝岫聳峰、旌旗列陣是也。所謂少者、 <u>気体</u> 充和、標格雅 秀、百般滋味、千種風流是也。	<u> 気体</u> 宏逸、令人味之不尽	<u>気</u> 有余高、体無所主		徐浩如蘿徳之士。動容温厚、举止端正。敦尚名節、 <u>体気</u> 純白	濃纖有方、肥瘦相和、骨力相称…常有生気	筆在指端則掌處、運動適意、騰瞿頓挫、生気在焉	不活与滞、如土塑木雕、不説不笑、板定固窒、無 <u>生気</u> 矣	徐書之時、当収視反應、總慮凝神、心正気和、則契於妙。書道玄妙、必資神遇、不可以力求也。機巧必須心悟、不可以目取也。心悟非心、合於妙也。仮華岠心、妙非毫端之妙。学者心悟於至道、則書契於無為。苟涉浮華、終懵於斯理也。	李邕得其気而失於体格	段鈞書、如高麗使人、抗浪甚有意気、 <u>滋韻</u> 終乏精味。	凡書画当報鐵	論人物要是 <u>趙</u> 勝、為尤難得	山谷之言曰、書画以 <u>観</u> 為主	自三代秦漢、非声不言觀。捨声言觀、自晋人始。唐人言顧者亦不多 見。惟論書画者頗及之。至近代先達、始推尊之以為極致。凡事既尽 其美、必有其趙。趙苟不勝、亦亡其美。	蔡京不得筆、蔡卞得筆而乏 <u>逸韻</u> 。	褚遂良<u>風</u>亂適逸飛動。	套峰山石刻体格気逸、密致而通理····································	書法貴巌鋒、然不得以模糊為藏鋒。須用筆如太阿馴馥之意、蓋以勁 利取勢、以虚和取趙。	柔和 <u></u> <u></u> 題 温雅 円和	殷鈞書、如高麗使人、抗浪甚有意気、滋韻終乏精味。	余志学之年、留心翰墨。味鍾張之余烈、袒羲献之前規、極慮専精、 時逾二紀、…観夫懸針、垂露之異、奔雷墜石之奇、湖飛麒駭之資、 鸞舞蛇驚之聽…東晋士人、互相陶泽。至於王謝之族、都庚之倫、縦 不尽其神奇、咸亦挹其 <u>風味。</u> 去之而滋永、斯道逾徵。
粉令	書概					張懐瓘論教 筆	明項穆論書				題摹燕部尚 父図	題絳本法帖				趙子昂 枯 樹賦真迹		率量法			
春决雅言	洪 觀	述書賦	統書評	統書評	答陶弘景論 書	御定佩文斎 書画録	御定佩文斎 書画録	筆體壽	墨池琑錄	古今書評			潜溪詩眼	潜溪詩眼	海岳名言		広芸舟双楫	画禅筆随筆	不明	古今書評	報報
項穆	劉熙載	資泉	米帯	米帯	梁武帝	張懐瓘	項穆	虞世南	李煜	袁昂	黄庭堅	黄庭堅	范温	小型	米帯	至世貞	康有為	董其昌	不明	袁昂	孫過庭
田	粔	唐	北东	北朱	涨	車	明	血	南唐	総	北宋	北条	₩	₩	北米	崩	無	明	不明	総	車
71	89	74	72	7.5	78	78	78	91	61	23	125	125	125	125	150	150	150	102	279	23	79
	2	2	2	2	2	2	2	m	7		2	2	2	23	2	2	2	က	4	_	
凝		体気						砂厝	体格	精味								妙悟	麗	举	举
1-002	1-067	1-069	1-069	1-069	1-070	1-070	1-070	2-015	5-014	1-001	1-080	1-080	1-080	1-080	1-086	1-086	1-086	2-015	3-093	1-001	1-001
気体	気体	気	体気	体気	生気	生気	生気	展	斌	韻	鎖	쁾		韻	逸韻	逸韻	逸韻	題	腴鷾	精味	風味
棌	送	気	黑	张	紙	张	紙	絃	张	鷾	鐦	鷾	噩	鷾	顗	鐦	鷾	韻	鷾	坐	举
四/2	四/2	四/2	四/2	四/2	四/2	四/2	四/2	四/2	四/2	四/3	四/3	四/3	四/3	四/3	四/3	8 /10	四/3	四/3	四/3	M/ 4	四/4

											鄭杓『衍極』 巻3造書篇 に付した注						
文則教言乃成其意、書則一字已見其心。…考其決意所由、從心者為上、 從服者為下。…雖功用多而有声、終性情少而無象、同乎糟粕、其味 可知。不由霊台、必神気。	書有老少、区別淺深、勢難異形、理則同体。所謂老者、結構精密、 体裁高古、凝岫聳峰、旌旗列陣是也。所謂少者、気体充和、標格雅 秀、百般 <u>滋味</u> 、千種風流是也。	至於王謝之族、都庾之倫、縦不尽其神奇、咸亦挹其 <u>風味</u> 。	旗蘇云、僧虔尋得書裔。雖不及古、不滅郄家所制。然述小王、尤尚古。 宜有豊厚淳朴、稍乏所華。若溪澗含水、岡巒被雪。雖基静粛、而寡 於風味。子曰、質勝文則野、是之謂乎。	余嘗謂希哲如王、謝門中佳弟子、雖偃蹇��逸、而不使人僧、跳蕩他 關如祭将軍、而有雅歌投壺 <u>風味</u> 。	漢隸之不可思議処、只是硬拙、初無布置等当之意、凡偏旁左右、寬 窄疎密、信手行去、一派天機。今所行聖林梁鶴碑、如擊模中物、絶 無 <u>風味</u> 、不知為誰翻摭者、可脈之甚。	書与画異形而同品、画之 <u>意象</u> 変化、不可勝窮、約之不出神能逸妙四 品而已。	なし		書与画異形而同 <u>品</u> 、画之意象変化、不可勝窮、約之不出神能逸妙四 品而已。	風神者、一須人品高。二須師法古。三須維準佳。四須險勁。五須高明。六須測況。七須時出新意。自然長者如秀整之士、短者如精悍徒。 瓊者如山澤之癱、肥者如貴游之子。勁者如美女。敧斜如酔仙、端楷如賢士。	品之与評同而 変異、評以討論其得失、品則考定其高下。	鍾張羲献、超然<u>逸品</u>。	較其優劣之差、為神妙能三品。	書有老少、区別浅深、勢難異形、理則同体。所謂老者、結構精密、 体裁高古、凝岫聳峰、旌旗列陣是也。所謂少者、気体充 <u>和</u> 、標格雅 秀、百般滋味、千種風流是也。(1-002〈滋味〉の用例と同じ)	書有老少、区別浅深、勢雖異形、理則同体。所謂老者、結構精密、 体裁高古、凝岫聳峰、旌旗列陣是也。所謂少者、気体充 <u>和</u> 、標格雅 秀、百般滋味、千種風流是也。(1-001〈味〉の用例と同じ)	凛之以風神、温之以妍潤、鼓之以枯勁、和之以開雅。	濃纖有方、肥瘦相和、骨力相称、蜿蜿暖暖視之不足、稜稜凛凛、常有生気、適限合心、便為甲科。 (3-088《骨力》の用例と同じ)
	老				器部門	書概		游不迫	書概					参	物		
羅	書法雅言	粗暈	華	拿州山人四 部稿	霜紅龕集	洪		/沈着痛快と優游不迫	ボ	%		書後品	書断	書法雅言	書法雅言	報報	答陶隠居論 書
張懐瓘	項穆	孫過庭	張懐瓘	王世貞	中旬	劉熙載		/豪放と婉約/	劉熙載	崇	劉有定	李嗣真	張懐瓘	項穆	項穆	孫過庭	梁武帝
쇹	明	赸	血	祖	疟	無		と降来	準	₩	汨	赸	赸	田	田	垂	煞
63	71	7.5	75	82	62	223			972	337	42	48	13	4	71	337	78
1	1	1	п	1		1		杰/天籟		1	1	1	1		1		7
						意象) …和/自然	意象	風神	퍁	떕	意外の妙	世	一級	風神	生気
1-001	1-002	1-003	1-003	1-003	1-003	1-031		(品格・品級)	1-031	1-055	2-013	2-013	4-059	1-001	1 - 002	1 - 055	1-070
长	滋味	風味	風味	風味	風味	意象	意境	퍨	唱	十品	理	唱歌	盟	林	林	和	4
举	举	举	举	举	举	意象	意境	(第五系列) [形態]	唱	떕	晤	굡	떔	柽	本	和	本
四/4	四/4	四/4	4 /四	四/ 4	N/ 4	四/5	9/11	(第五系	五/0	五/0	五/0	五/ 0	五/ 0	五/ 1	五/1	五/1	五/1

							l			1				\Box
						原典未詳								
公書之時、当収視反聴、絶慮緩神、心正気和、則契於妙。書道玄妙、必資神遇、不可以力求也。機巧必須心悟、不可以目取也。心悟非心。合於妙也。心程能心。妙非遙端之妙。学者心悟於至道。則書袈無為。苟涉泽華。於僧於斯理也。 (「衛疇廠職與無典」月用原之の「」で省略されている部分に、「衛職職職職與無典」月用原之の「」で省略されている部分に、(和)、仲和)の用例あり。 初書之時、収視反聴、絶慮恰相。心正気和、則契節人、政道企和、即契於玄妙。心神不正、字則談斜、志気不和、則孕順化、其道如魯廟之器也。處則欲。満則覆。中則正。正者 <u>冲和</u> 之謂也。	至若数画並施、其形各異、衆点斉列、為体互乖、一点成一字之規、 一字乃粹篇之準、違而不犯、 <u>和</u> 而不同。	濃纖有方、肥瘦相和、骨力相称、蜿蜿暖暖視之不足、稜稜凛凛、常有生気、適眠合心、便為甲科。 (1-170 (生気)の用例と同じ)	夫字以神為精魂。神若不紅、則字無態度也。以心為筋骨。心若不堅、 則字無勁健也。以副毛為皮膚。副若不円、則字無温調也。	右軍之書不言而四時之気亦備。 (『範疇辞典』引用部分の続きに、〈中和〉の用例あり。右軍之書不 言而四時之気亦備、所謂 <u>中和</u> 載可経也。以毘剛毘柔之意学之、総無 是処。)	書法貴藏鋒、然不得以模糊為藏鋒。須用筆如太阿刺馥之意、蓋以勁 利取勢、以 <u>虚和</u> 取體。	柔和腴觀、温雅 <u>円和</u> 。	率更風骨内柔、神明外朗、 <u>清和</u> 秀潤、風韻絶人。	逸少筆迹適調、独擅一家之美、天資 <u>自然</u> 、風神蓋代。 (3-118〈自然〉の用例と同じ。)	同自然之妙有、非力運之能成。	学書須是収貴人真跡佳妙者、可以詳視其先後筆勢軽重往復之法、若 只看碑本、別惟得字画、全不見其筆法神気、終離精進。又学時不在 旋看字本、遂画臨版、但貴以行立坐臥常諦玩、経目著心、久之、直 然有悟入処。信意運筆、不覚得其精微、斯為善学。	几字、毎落筆皆從点起。点定、則四面皆円、筆有主宰、不致偏枯草率。波折鉤勒、一気相生、風骨自然遒勁。董文敏肅、如大力人通身是力、倒輒能起。又云、自収自到、自起自結。皆此意也。褚河南行書、趙文敏行楷、細参自能悟入。	書当选 <u>平自然。</u> 蔡中郎但謂書 <u>肇于自然、此立天以定人、尚未及乎由</u> 人復天也。	風神者、一須人品高。二須師法古。三須蘇集佳。四須險勁。五須高明。六須潤沢。七須時出新意。自然長者如秀整之士、短者如精倖徒。 瘦者如山澤之權、肥者如貴游之子。勁者如美女。發斜如酔仙、端楷如賢士。	夫書肇於自然、自然既立、陰陽生焉、陰陽既生、形勢出矣。
凝				書	斯 華 法					学書須観真 迹		書 概		
筆髓論	舞	答陶隠居論 書	指意	州	画禅室随筆	不明	竹雲題跋	星	細軸	負喧野録	臨地管見	洪	統書譜	九勢
虞世南	孫過庭	梁武帝	唐太宗	劉熙載	重其冒	不明	憲出	張懐瓘	孫過庭	范成大	周星蓮	劉熙載	装	秦闿
	一一世	鯸	一一一	無	通	不明	無	ഘ	世	極	無	無	€₭	後漢
91	22	263	286	14	102	279	288	337	180	115	119	282	337	376
т	4	4	4	23	က	4	4	1	2	m	62	က	п	4
沙语	市一無職、 参一無対	一一一	温潤	棌	妙厝	鰄	秀潤	風神	倉	悟入	悟入	天と人	風神	自然
2-015	3-003	3-088	3-095	1-061	2-015	3-093	3-096	1-055	1-098	2-016	2-016	2-063	1-055	3-118
₽	柽	星	柽	中	虚和	円和	清和	自然	自然	田然	田然	田然	田然	自然
基	柽	中	柽	柽	柽	和	和	自然	自然	自然	田然	自然	自然	自然
五/1	五/1	五/1	五/1	五/1	五/1	五/1	五/1	五/2	五/2	五/2	五/2	五/2	五/2	五/2

心不厭精、手不忘熱。若運用尽於精熱、規矩關於胸襟、自 <u>然</u> 容与徘 和、意先筆後、瀟洒流落、翰逸神飛。	遊少筆遊過調、独擅一家之業、天質自然、風神蓋代。 (1-055〈風神〉の用例と同じ。)	遠而望之、若親風厲水、清波潑漣。就而察之、有若 <u>自然</u> 。信責唐之 遺跡、為六芸之範先。	偶合神交、 <u>自然</u> 冥契者	大凡天地問至徽至妙、莫如化工。故曰神曰化、皆由合乎自然、不煩 湊泊。物物有之、書固宜然字有自然之形、筆有自然之勢、順筆 之勢則字形成、尽筆之勢則字法妙。不仮安排目前、皆具此化工也。	観其体勢、得之 <u>自然</u> 、意不在乎筆墨、若高逸之士、雖在布衣、有做 然之色。	なし	書要兼備 <u>陰陽</u> 二気。大凡沈著屈鬱、 <u>陰</u> 也、奇抜豪達、 <u>陽</u> 也。	字雖有質、跡本無為。稟陰陽而動静、体万物以成形。 (5-011〈体〉の用例と同じ)	古人之書画、与造化同根、陰陽同條。	夫書肇於自然、自然既立、 <u>陰陽</u> 生焉、 <u>陰陽</u> 既生、形勢出矣。	古人写字、政如作文。有字法、有章法、有篇法。終篇結構、首尾相 応。故云、一点成一字之規、一字乃終篇之主。起伏隱顕、 <u>陰陽</u> 向背、 皆有意態。	字羅右質、跡本無為。稟陰陽而動静、体万物以成形。 (2018 〈神遇〉の用例と同じ)	大凡筆要適勁。適者 <u>柔</u> 而不弱、勁者 <u>剛</u> 亦不脆。適勁是画家第一筆、 煉成通於書矣。	<u>鄭</u> 約流利	なっ
							書概	契妙				契妙			
細細	響	四体書勢	書後品	細	華		洪	筆髓論		九勢	法書通釈	美闘	柴大画説	細	
孫過庭	張懐瓘	衛恒	李嗣真	湯臨初	張懐瓘		劉熙載	虞世南	熊 賢	黎圖	張紳	虞世南	葉賢	庾元威	
血	血	温田	血	田	桖		無	血	無	後漢	田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田	桖	無	氷	
377	378	380	382	409	131		14	135	275	376	77	20	249	225	
4	4	4	4	4	7		2	3	3	4	9	7	4	4	
百然	自然	自然	自然	化工と画工	体勢		魚	神遇	生趣	自然	報報	夲	適勁	豪放と婉 約	
3-118	3-118	3-118	3-118	3-120	5-025		1-061	2-018	2-060	3-118	4-078	5-011	3-085	3-076	
自然	自然	自然	自然	自然	自然		割	影響	修	後陽	逐	後陽	米	婉約	
自然	自然	自然	自然	世然	自然	天籟	陽圏と 廃業	陽悪と 陰柔	陽剛と 陰柔	発 系 条 条	陽圏を発表	発 発 発	発 系 条	豪放と 熱治	沈着痛 快と優 悠不追
五/2	五/2	五/2	五/2	五/2	五/2	五/3	五/4	五/4	五/4	五/4	五/4	五/4	五/4	五/5	五/ 6

Ⅵ. 用例検出結果考察

第一系列「心」

第一系列「心」は、性、情、意、志、趣、趣興、意興、性霊の範疇から構成される。 成復旺氏によると、「心」は、美学における主体についての範疇であり、審美の主体の心の 境地のことをいう。「心」は、「心」と「物」との関係において示される。「心」とは、「物」 と相対するもののことをいい、主体の精神の境地のことを指す。古典美学においては、伝統 的に人の「心」が「物」に応じて「心」が動くことによって、「物」と自己が交じりあって ひとつに融合するうちに、主体は審美の境地に入っていくと考えられてきた。

検出の結果、用例数は以下の通りである。心24例、性15例、情18例、意35例、志2例、趣7例 計101例。趣興、意興、性霊の二字から成る術語は、性、情、意、志、趣より派生したものであるが書論から見いだせなかった。その中でも、書論において最も用例数の多かった「心」そのものの術語とその範疇である「意」は第一系列の中で、根幹を成す術語であると考える。

「心」の用例には、24例中15例と唐代の書論が多く引かれている。「手」や「筆」といった 術語と対になり、心と技法に関するもの「心不厭精、手不忘熟」(孫過庭『書譜』)や、書は 心を表す「書則一字已見其心」(張懐瓘『文字論』)ことを述べたものがある。心と技法に関するものではまた、柳公権の「心正則筆正」があり。用筆は心にあり、心が正しければ自ず から用筆も正しくなるということである。

虞世南の「機巧必須心悟、不可以目取也」(『筆髄論』)という言葉は、書の巧妙さは心で悟るものであって、目で見て得るものではないという意である。「目」という外的なものではなく、「心」という内的なものを重視しているのである。この様に、「心」という範疇は、書において本質的原理を述べる上で根幹をなす範疇であると言える。(西原 歩)

第二系列「物」

第二系列「物」は、形、質、象、景、境、天、道などの範疇から構成される。これらは「主体」に対する「客体」として包括されるもので、成復旺氏によれば、「精神」を担い、「精神」に達するための媒介者である。

書は言葉を視覚的な形象として定着させたものであるから、「形」を離れては存在しない。 ゆえに、人々が書の「形」に関心を向けてきたことは当然である。初期の書論のひとつ、西 晋の衛恒が著した『四体書勢』は、書の形態をさまざまな自然形象に喩えている。また、書を構成する点画が骨、肉、筋といった人体の比喩によって論じられ始めたのは、早くも六朝時代のことである。さらに唐代以降、筆法、結構、章法などの技法や形式について、さかんに議論されるようになった。

しかし、同時に注目されるのは、書において「形」に拘わることがつねに厳しく戒められてきたことだ。これほど「形」を問題にしながら、「形」を揚棄することが目指されてきたのである。中国書論の本流は、形式論や技法論ではなく、むしろそうした"形而上学"にある。たとえば、南朝斉の王僧虔によるものとされる『筆意賛』には、「書の妙道は、神彩を上と為し、形質は之に次ぐ」とある。このような考え方は、歴代の書論を通じてみられるものである。清の包世臣の『芸舟双楫』には「書の太局は気を以て主と為す。気得れば則ち形体之に随う」といい、劉煕載の『書概』には「書を学ぶは仙を学ぶに通ず。神を錬るは最上、気を錬るは之に次ぎ、形を錬るは又た之に次ぐ」という。いずれも、「形」以上に、「形」ではとらえられぬ神彩、神、気を重視するのである。

それは、中国美学の基礎をなすひとつの理念を示している。すなわち、美は外在的な物に 宿るのではなく、客体(物、形)が主体(心)と合一したときにはじめて成立するという考 え方である。(亀澤孝幸)

第三系列「感」

『中国美学範疇辞典』の「引論」に示されている第三系列は【主体】(第一系列)と【客体】(第二系列)の統一による、審美の心理活動のことを意味している。この第三系列について成復旺氏は次のように述べている。

これらに共通する特徴は二つある。一つは「投入式」ということである。つまり「こころ」が「もの」の中に入りこみ、他人の立場に身を置くようにしてそれを体得するのである。 …もう一つは「非倫理性」ということである。つまり、あれこれと連想を自由に繰り返すことである。

中国美学の特徴は、単純に「もの」だけの美は存在せず、「こころ」と「もの」、つまり主体と客体の間で上記のような関係が成立することによって美が生じるという点にある。このような関係の系列に含まれる範疇語に「観」がある。唐代の張懐瓘は「深く書を識る者は、惟だ神彩のみ観て、字形を見ず。」(『書断』)といっており、深く書を理解している人は内面的な「神彩」だけを「観」て、外面的な字形は見ないという。形を通じてその内面にある神

彩を感じ取ることが本質であり、形そのものを見ることは問題にしないのである。これが「観」ということなのである。つまり、第三系列は中国の伝統的な文芸観に基づく鑑賞と理解でき、「作品を見てその良さを味わう」といった現代的な解釈による鑑賞と異なるという点を見落としてはならない。また、これらの範疇語は「こころ」と「もの」の関係において成立するものであるから、時代や個人の相違、またはその背景に思想や価値観の影響は、他の系列よりも強いと推測する。この他にも、遊、体、品、悟、興、感、といった範疇語が第三系列に含まれる。『中国美学範疇辞典』に収録する書論の用例では、観1例、体16例、悟9例を検出し、遊、品、興、感の使用例は確認できなかった。(藤森大雅)

第四系列「合」

第四系列の特徴は主体と客体を兼ね、統一されている点にある。該当する範疇語と『中国 美学範疇辞典』に収録する書論の用例は、神27例、気35例、韻10例、味8例、意象1例、意 境0例である。

これらの範疇語は『中国美学範疇辞典』の書論の用例をまとめた『審美術語用例集』でも、 他の系列に比べ多くの用例が確認できる。

書の妙道は、神彩を上と為し、形質之に次ぐ。(王僧虔『筆意賛』)

蔡邕の書は、骨気洞達し、爽爽として神有り (袁昂『古今書評』)

股鈞の書、高麗の使人の如し。浪に抗ひ甚だ意気有るも、滋韻は終に精味に乏し。(袁昂『古今書評』)

「神」「気」「韻」「味」が他の言葉と結び付いて熟語を形成することにより、より多くの美を表現することが可能であり、用例も多くなる。この系列にふくまれる範疇語はその他にも挙げられよう。『中国美学範疇辞典』に挙げられた範疇語は、もともとその他の文芸領域で使用されたものが書の領域にも派生したものであるが、中国の伝統的な美を表す範疇語として重要な地位を占めたものでもあり、書の美を表す主要な範疇語となっていく。このように、第四系列は美そのものであるため、他の系列と比較して使用頻度が高いのは当然とも考えられる。

しかし、これらと同様に中国の文芸理論において重要な概念でありながら、「意象」や「意境」は最も古いものでも清代後期の書論が初見で、その後の用例もごく僅かである。特に「意境」は王国維によって提唱された範疇であるように、近代の書法美学研究において「意象」や「意境」が取り上げられるようになっていることから、書論においては新しい範

疇だと言えるだろう。本研究の「書の芸術性に関する術語と現代学者の解釈」の趣旨に合う 点でも興味深い範疇としてとらえられる。「意象」や「意境」の概念をもって書を捉えるこ とによって、それ以前には認識されなかった書の美や構造などに、新たな展開がもたらされ るのか興味ぶかい。(藤森大雅)

第五系列「品」

第五系列「品」は、和、自然、天籟、陽剛と陰柔、豪放と婉約、沈着痛快と優游不迫、品、などの範疇から構成される。これらは、「美」における区別、あるいは「美」のさまざまな「形態」を指す範疇である。成復旺氏によれば、「陽剛」と「陰柔」、「豪放」と「婉約」、「沈着痛快」と「優游不迫」は、すべて基本的に「強壮」と「弱婉」の審美差異である。「和」は極端であることに反対し、相手との中和を主張するということであり、「自然」「天籟」は意識的に為すことに反対し、自然に出てくることを提唱するものである。書論の用例は、和12例、自然16例、天籟 0 例、陽剛と陰柔 8 例、豪放と婉約 1 例、沈着痛快と優游不迫 0 例、品 7 例、計44例を検出した。

このうち、書論における「和」の用例は、大別すると5種類ある。気と関連するもの(4例)、中和の意で用いられているもの(1例)、神に関するもの(1例)、点画や章法の調和について述べているもの(2例)、趣をあらわしたもの(3例)である。

まず、気に関連するものには、虞世南『筆髄論』の「心正にして気和すれば則ち妙に契す。 心神 正ならざれば書は則ち敬斜し、志気 和せざれば字は則ち顚仆す。」や、劉熙載『書 概』にみえる「右軍の書は、『言わずして四時の気も亦た備わるもの』にして、所謂 『中和 誠に経とすべし』なり。」等がある。また『筆髄論』には、書の基準に中和を挙げて「其の 道は魯廟の器に同じ。…正は則ち冲和の謂なり。」とあり、李世民『指意』には神について 「夫れ字は神を以て精魂と為す。神 若し和ならざれば、則ち字に態度無きなり。」とある。 点画や章法の調和についての用例には、孫過庭『書譜』の「違いて犯さず、和して同せず」 や、梁武帝『答陶隠居論書』の「肥痩相い和し、骨力相い称う」があり、趣に関するものに は、例えば王澍が欧陽詢の書を評して「清和秀潤」としたものがある。(池田絵理香)

Ⅷ. 用例検出結果一覧表

第一 系列	24/心	15/性	18/情	35/意	2/志	7/趣	0/趣興	0/意興	0/性霊	101例
第二 系列	16/形	11/質	6/象	0/景	0/境	1/天	1/道			35例
第三 系列	1/観	0/遊	16/体	0/品	9/悟	0/興	0/感			26例
第四 系列	27/神	35/気	10/韻	8/味	1/意象	0/意境				81例
第五 系列	7/品	11/和	16/ 自然	0/天籟	8/陽剛 と陰柔	1/豪放 と婉約	0/沈着 痛快と 優悠不 迫			43例
合計										286例

「審美術語用例集」に検出した用例を一覧表に整理すると上記のようになった。全286例を 見てみると、上記「VI. 用例検出結果考察」に記した通り、第一系列「心」の「心」「意」 と第四系列「合」の「神」「気」に用例が多いことが判明した。

この結果は、『中国美学範疇辞典』に限るものではあるが、大よその傾向を示しているものと考えられる。(河内利治)